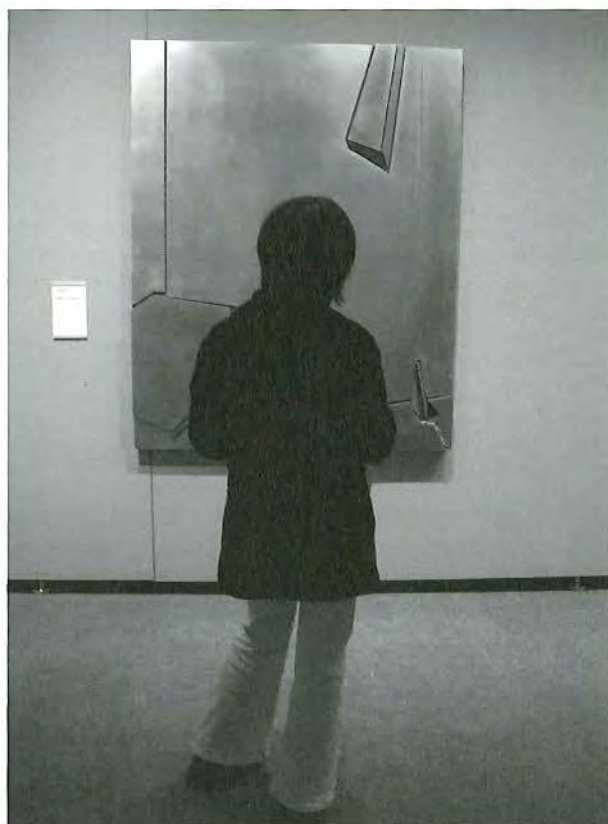


平成16年度兵庫教育大学特別教育支援費にもとづく教育研究事業

美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ

——兵庫県立美術館における子どものための鑑賞教育の実践と
学校教師の指導・運営方法論に関する共同研究——

記録報告



兵庫教育大学芸術系教育講座美術分野

■目次

ご挨拶	1
目次	2
カラー写真記録	3-6
本プロジェクトの趣旨	7
運営日程表（全体）	8
①12月1日第1回兵庫県立美術館見学：	
美術館学芸員との交流および鑑賞指導実践のための展示下見	9
兵庫県立美術館学芸員相良周作氏によるレクチャー〔抄録〕	10
「常設展示」見学と「常設展示における鑑賞教育」の意義	11-13
資料一附属小学校作成指導案（2種）	14
附属小学校作成指導案(2種)とその選択決定について	15-16
資料一トーク実践のための作品選択（第1次）	17
ギャラリートーク実践のための作品選択決定について（第2次）	18
②12月15日「事前学習」教育実践演習スケジュール	19
事前学習（15分）について	19-20
事前学習用PowerPointファイルの制作（第1次・第2次）	21-24
資料一事前アンケートの書式と回答結果	25
事前アンケートの目的と統計結果に対する分析評価	26
③12月22日附属小6年生児童団体見学スケジュール	27-29
ギャラリートークの記録および考察	30-33
ギャラリートーク論（1）	34-35
ギャラリートーク論（2）	36-37
資料一ワークシート記入例(表・裏)	38-39
ワークシートのポイント：形式と製作過程について	40-41
ワークシート付随のアンケート調査：目的および結果と分析	42-44
参加者（院生・自主参加学生・教員・教諭）アンケート結果	45-47
附属小学校の声：図画工作担当教諭と6年生引率教諭の意見	48
④1月28日兵庫県立美術館訪問見学スケジュール	49
神戸市立横尾小学校の美術館見学「しおり」例+記録写真	50-51
ミュージアム・エドゥケーターと学校教諭： 鑑賞教育における学校教諭の課題	52-53
終わりに：学校団体見学という教育	54
資料一「兵庫県立美術館 団体観賞ガイド」	55-56
資料二 予算収支報告	57
研究分担者一覧・奥付	58

「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」
—兵庫県立美術館における子どものための鑑賞教育の実践と
学校教師の指導・運営方法論に関する共同研究—に寄せて

兵庫教育大学芸術系教育講座は、学校教育における図画工作科、美術科教育の指導・実践方法の研究の場として、現職学校教諭のほか美術教育に関心をもつ数多くの若手研究者を大学院生として迎えている。このたび、平成16年度の本学特別教育支援費にもとづく授業強化ならびに実践共同研究の取り組みとして「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」を開催できたことは、院生ならびに本学教員にとり、鑑賞教育の実践的な指導方法の研究に対する視点をあらたにする絶好の機会となった。また、附属小学校との連携協力により、鑑賞教育の機会として6年生児童の美術館見学を実現し、本学院生による鑑賞指導の実践演習も含めて、多様でより質の高い美術教育の可能性を追求することができたのは誠によろこばしいことである。関係者各位に御礼を申し上げたい。今後とも連携協力をさらに深め、同様のプロジェクトを試みていくことで、図画工作科・美術科教育の一層の向上をはかりたいと考えている。ギャラリートークという形式に焦点をしばりながら、美術館における学校団体見学と鑑賞指導のあり方を再考・研究する本プロジェクトの記録報告が、諸研究者ならびに学校教育現場における教員にとり、有益な参考資料となることを願ってやまない。

平成17年3月 兵庫教育大学芸術系教育講座主任・教授
森岡 茂勝

鑑賞教育プロジェクトからはじまるもの

今回のプロジェクトの話承ったのは、2学期も中頃にさしかかった頃でした。実施までの時間は限られていて準備に不安はありましたが、大学と附属小、大学院生、学部生も参加しての鑑賞教育プロジェクトという企画に魅力を感じました。これまでの附属小学校での鑑賞は、表現を前提としたものでした。したがって、子どもたちが、友だちの作品ではない美術館の作品とどのように向き合うのか、鑑賞を通じてどんな力がつくのかを取り組みの中で検証しつつ、あらたな鑑賞教育の道筋を見つけたいと考えました。しかし、鑑賞の捉え方については、美術館と小学校との間には違いがあります。また、大人が学ばせたいことと、子どもの学ぶ道筋にもまだまだ摺り合わせが必要です。そのようなスタートライン上にも揃い踏みができていない状態でのスタートには不安があります。でも机上の話だけでは何も生まれません。まずは、子どもたちといっしょに行動を起こすこと。その上で、子どもたちの姿から理論が構築され、子どもたちにとって何が必要なのかを捉えることができ、子どもたちのための鑑賞教育が生まれてくるものと考えます。今回の取り組みからは、多くの成果と課題が見えてくるでしょう。できることならば子どもたちの視線に立ち、そこから縮小再生産でない、あらたな鑑賞教育が構築されていくことを願ってやみません。

平成17年3月 兵庫教育大学附属小学校図画工作科
中田 高俊

2004/12/01 兵庫県立美術館担当学芸員によるレクチャー受講と展示下見
(兵庫教育大学大学院生 12 名、芸術系教育講座・実技センター教員 5 名、附属小学校教員 1 名が参加)

○兵庫県立美術館の外観



○美術館の相良周一氏（教育普及担当学芸員）によるレクチャーと質疑応答

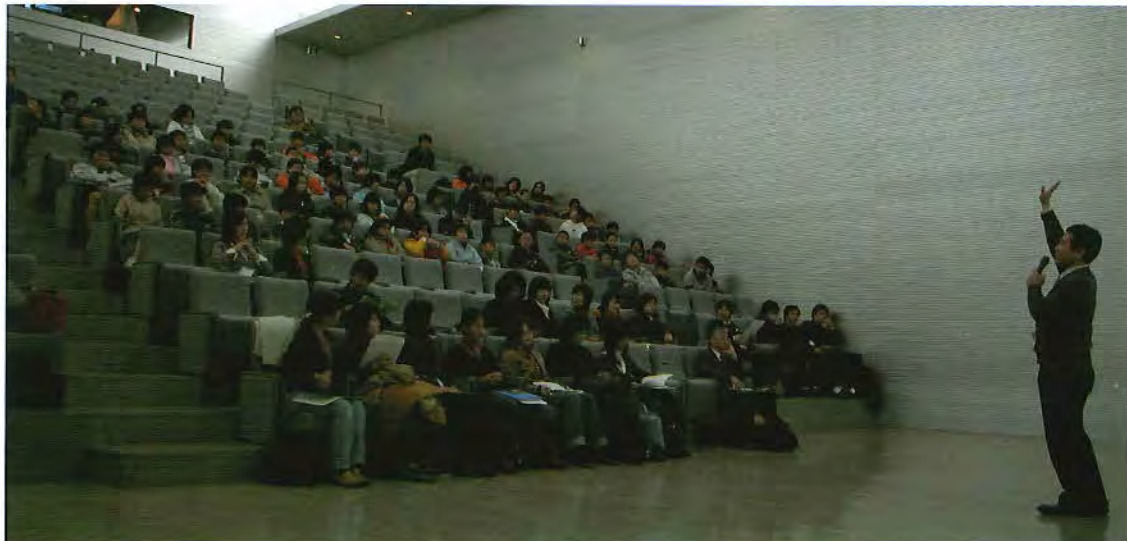


○鑑賞指導の実践のための館内見学・下見



2004/12/22 兵庫教育大学大学院生による鑑賞指導（ギャラリートーク）
（兵庫教育大学附属小学校 6年生 77名が参加）

○学芸員による事前レクチャー



○大学院生による鑑賞指導



○自由鑑賞

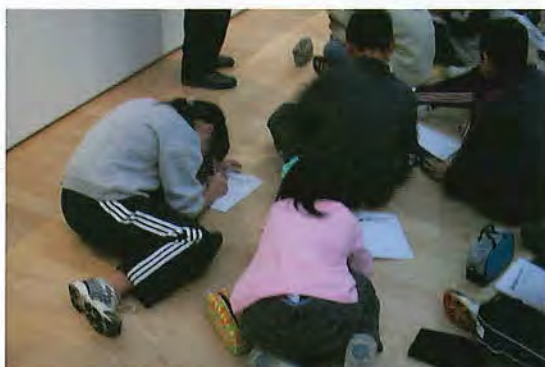


2005/01/28 兵庫県立美術館スタッフによる鑑賞指導を觀察
(神戸市立横尾小学校5年生2クラスの鑑賞学習を見学)

○学芸員による事前レクチャー



○学芸員とミュージアム・エデュケーターによる鑑賞指導



○児童による発表「お気に入りを見つけよう！」



本プロジェクトの趣旨

「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」は、平成16年度兵庫教育大学特別教育支援費にもとづく教育研究の取り組みであり、授業科目内容の強化・改善プロジェクトとして採択・実施された。以下に採択申請時の計画書〔平成16年9月採択〕の抜粋を示す。

重点配分：16' 特別教育支援費計画調書〔抜粋〕	
	所 属 芸術系教育講座（美術）
教育支援措置が必要な事業等	「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」の開催 兵庫県立美術館・姫路市立美術館・小磯良平記念美術館〔仮〕における子どものための鑑賞教育の実践と学校教師の指導・運営方法論に関する共同研究
教育支援措置が必要な事業等の概要	<p>本事業は、本学全講座の院生の自主参加を前提として、附属学校教諭・実技センター教官・芸術系教育講座美術分野教官の共同研究により、美術館と連携した「鑑賞指導」の運営実践およびその方法に対する批判的検討をおこないつつ、実効性のある「鑑賞教育」を進める学校教諭の育成を目指すものである。</p> <p>具体的には、①美術館の内情視察と交流（教育普及担当者・学芸員による小レクチャーの受講と展覧と展覧会準備作業たとえば展示・撤収作業の見学）、②美術館が主催・運営する来館者向けワークショップ・美術鑑賞ガイド事業の観察研究、さらには③学校見学としての引率児童に対する「美術館における鑑賞教育ワークショップ」の実践をおこなう。上記③の実施にあたっては、附属小学校第5学年（仮・交渉中）を引率し、図工担当教諭を中心とした附属校教諭と連携しながら、本学院生による「鑑賞教育」実践を試みる。講座美術分野および実技センターの教官の指導のもと、学校見学における美術鑑賞教育の指導・運営準備・実践のポイントを探り、学校教諭による「鑑賞」指導のあり方を研究すること、美術館との連携を高めながら真に有効な「鑑賞教育」を実践しうる学校教員を実際に育成する研究教育事業としたい。</p> <p>なお、院授業科目「鑑賞教育論」履修学生（例年5-6名）は参加必修とし、さらに全学院生の自由参加を求める（計40名程度）。年度末には研究分担教官・教諭および参加院生による「鑑賞教育実践論集」〔仮〕を制作する。本事業は、学校教育における美術館の活用と鑑賞教育のあり方に対する学校教員の意識と理解を高め、わが国における学校鑑賞教育の実践法に関する方法論的熟成に貢献するものとなる。</p>

* 本プロジェクトの実施運営組織、教育研究者名については58ページを参照。

*

上記計画書には、協力をあおぐ訪問先美術館として、本学に比較的近く教育普及活動が充実している3つの公立美術館の名が挙がる。だが、本プロジェクト採択決定後の準備期間が限られていたため、むしろ1館に限定して交流密度を高めたほうが質の高い活動ができると判断し、比較的大規模で多様なコレクションをもつ兵庫県立美術館のみを訪問先とすることとして、協力を願った。

美術館は社会教育施設であるが、バブル経済とその崩壊期、1980年代に生じた教育普及活動の変革は、学校の児童生徒に対する新しい鑑賞教育の導入と強化・定着をももたらしている。美術館における教育普及活動の運営実態を知り、社会の実勢に応えた美術鑑賞教育とはいかなるものなのかを再考すること、学校教育関係者がみずからの教育指導のあり方を強化・改善することが、本プロジェクトの本質的な目的である。

〔喜多村明里／本学芸術系教育講座〕

運営日程表（全）

下記の全日程の計画準備のため、本プロジェクトの主担当教員らは10月末より兵庫県立美術館を訪れて交渉を重ねた。

11月17日（水）12:10学内事前説明会（30分）

19日（金）12:10学内事前説明会（30分）／17:00 参加申し込み締切

12月1日（水）①兵庫県立美術館訪問（第1回／バス1台乗車15名、参加計18名）

（院生12＋芸術系講座・実技センター教員5＋附属小学校教諭1名） **展示の下見と計画準備**

同美術館教育普及担当者、学芸員相良周一氏によるレクチャーの受講と質疑応答

22日鑑賞指導の実践のための館内見学・下見

附属小学校中田高俊教諭による二つの指導案の提示と選択決定

鑑賞指導における作品選択の希望調査

12月8日（水）通常授業（院生＋芸術系講座・実技センター教員） 事前学習と22日当日の準備

鑑賞指導における作品選択の要点と最終決定

鑑賞指導（ギャラリートーク）の意図・目的の確認とタイム・スケジュール

事前学習の内容案（PowerPointファイル）と改良について

自由鑑賞時間の補助教材としてのワークシート案と改良について

12月15日（水）○附属小学校訪問 院生による事前学習の実践（15分）

（院生＋芸術系講座・実技センター教員＋附属小学校教諭＋児童）

「兵庫県立美術館へ行こう！」（PowerPointファイル）を提示

兵庫県立近代美術館の一般的特徴、建物や著名な所蔵作品を紹介する

美術館訪問における一般マナー「5つの約束」を周知・教育する

12月22日（水）②兵庫県立美術館訪問（第2回／バス3台108名乗車、参加110名見込）

（附属小6年生全79名・同教諭5＋院生約20＋芸術系講座教員6＝110名）

学校団体見学としての美術館訪問・院生による児童への鑑賞指導の実践演習

児童に対する兵庫県立美術館の挨拶とお話

院生による鑑賞指導（ギャラリートーク）と

自由鑑賞（ワークシート使用）

終わりの挨拶・児童の帰校

自己評価アンケートにもとづく反省会

1月12・19・26日（水）通常授業

鑑賞指導・ギャラリートーク誘導の要点について

兵庫県立美術館の展示

11/27-3/13

「コレクション展Ⅲ」

・版画＋彫刻／絵画

・グループ「位」

*「常設展示」の特性を重視すること

1月28日（金）③兵庫県立美術館訪問（第3回／バス1台21人乗車、参加計23人）

（院生17＋芸術系講座・実技センター教員6） **兵庫県立美術館が主導する鑑賞指導との比較**

神戸市立横尾小学校5年生児童65名の美術館訪問の様相を見る

兵庫県立美術館スタッフによる鑑賞指導の実態と方法・パターンの観察

[終了]

12月1日（水）第1回兵庫県立美術館見学
美術館学芸員との交流および
学校団体見学における鑑賞指導実践のための展示下見

■タイムスケジュール

10:30 集合（本学事務局棟南側）→10:40出発（中型バス1台）

11:50 兵庫県立美術館に到着、館内自由見学～各自昼食



13:00 小レクチャー（1）と質疑応答（レクチャー室）

司会：喜多村明里（本学芸術系教育講座）

講師：相良周作 氏（兵庫県立美術館学芸員・
教育支援・事業グループ）

題目：「兵庫県立美術館における
教育普及活動と鑑賞教育の課題」

15:00 常設展示見学＝12月22日附属小児童団体見学に備えた会場下見と鑑賞（展示室）

相良氏の案内で計8室からなる常設展示を見学、

- ①ギャラリートークの作品選択を考えながら鑑賞する。
- ②作品解説やギャラリートークをおこなう状況を各自想定しながら展示室の空間を確認する。
- ③児童生徒の行動範囲の安全、出入口と経路、トイレの場所などを確かめる。



16:00 小レクチャー（2）「学習指導案に関するディスカッションと人材交流（レクチャー室）

司会：初田 隆（本学実技教育研究センター）

講師：中田高俊（本学附属小学校教諭）

「鑑賞教育の学習指導案について」

同席：相良周作氏、喜多村明里

学校現場における美術館見学の「学習指導案」の実例を2点示し、12月22日に実施する附属小学校の団体見学について、プログラムの大枠を討議のうえ決定する。



16:30 帰途△ バスにての帰途、参加者は車中で「印象に残った作品」「ギャラリートークの対象に選びたい作品」「ギャラリートークが出来そうな作品」を用紙に記入・提出した。



17:45 本学に帰着、終了。

「兵庫県立美術館における教育普及活動とギャラリートークについて」 ——2004年12月1日レクチャー【抄録】

講師：相良 周作 氏【兵庫県立美術館学芸員・教育支援・事業グループ】

兵庫県立美術館は1970年に「兵庫県立近代美術館」として開館、1995年の阪神・淡路大震災を契機として王子公園からHAT神戸へと新築移転した。2002年4月、「兵庫県立美術館—芸術の館—」と改称して新たに開館した本美術館は「文化の復興」のシンボルでもある。市民と地域の文化の担い手のひとつとして、兵庫県立美術館は教育普及活動に力を入れ、学校団体見学の受け入れや子どもに対する教育事業活動を積極的に展開・支援し続けていく。

まずは、建物施設概要を示したリーフレットなどの資料と、「団体観賞のしおり」【本書に転載】を参照して欲しい。兵庫県立美術館は昨年度、学校団体見学として延べ4000人余の生徒児童を迎え、教育普及担当の学芸員とミュージアム・エドゥケーターの計3名が、ギャラリートークなどの鑑賞ガイド・鑑賞指導をおこなっている。市民ボランティアの協力も大きい。美術館の内情や活用方法、美術館が実施しているギャラリートークという鑑賞指導のあり方についてなど、より多くの学校の先生方に関心を持っていただければ幸いである。

さて、**常設展示を鑑賞する場合**に注意すべきことは、美術館がそれらの美術品を所蔵している理由を知ることだろう。一般に、美術館の所蔵品やコレクションは「美術品の収集指針」に基づきながら、購入や寄贈によって集められる。本美術館が現在所蔵する美術品の多くは、旧「兵庫県立近代美術館」時代の収集指針にもとづくもので、海外の彫刻と内外の近代版画、郷土ゆかりの作家の作品が数多くある。現在の常設展示「コレクション展Ⅲ 館蔵版画大公開」においても、本美術館のコレクションの特性を味わっていただければと思う。

本美術館が**子どもを対象にして実施するギャラリートーク**は、まず子どもが感じ取ること、子どもに見ることから出発して、さらに「よりよくみる」ことを導くよう、指導者が話しかけ、問いかける形をとる。1、2秒見るだけで、本当は何を見たらよいかかわからないまま見終わってしまうという人は、単に視覚的に「ものを見た」に過ぎない。芸術作品や美術品に対する「ものの見方」として、じっくり考えながら見る、味わいながら楽しく見るという経験をギャラリートークの場で教えること、提供することが重要だろう。**小磯良平《斉唱》**を例に挙げよう。

「何の絵かな——女の人たちが歌をうたっているところ。——音は聞こえないのに、口を開けているだけで何故、歌っているとわかるの？——楽譜を持っているから。——でも、楽譜や音符は見えないよ、ただの紙かもしれない。それでも歌っているように見えるね。うまく描いてあるからかな。ところで、女の人たちは何人かな——9人？ でも脚は13、4本ある。



——人数はわかんないね。お揃いの服を着ているのに裸足だし、何故だろう？ 顔つきもよく見てね——実はね、画家の小磯良平さんはひとりの同じ人を、少しずつ違う姿勢や角度で繰り返して描いたんだよ。工夫して作り上げた《斉唱》の絵なんだね。」

1、2秒ではなく10分、20分かけて対話し、作品をよく見て考えながら自分なりの発見をするというプロセスの面白さを知ってもらうことが、本美術館で実施しているギャラリートークの本質的な目的である。学校教育では学習成果の評価方法が問題となるかもしれないが、子どもたちが、美術作品の魅力や面白さを自分で発見することを学んで成長していくということを、重視した評価が必要だろう。美術館での学校団体見学・ギャラリートークを経験して、美術と美術館を愛する人、子どもたちが増えることを願ってやまない。【抄録】

「常設展示」見学と「常設展示における鑑賞教育」の意義

1. 「常設展示」見学の重要性

本プロジェクトにおける学校見学・美術鑑賞教育の場には、兵庫県立美術館の常設展示「コレクション展Ⅲ」[2004年11月27日～翌年3月13日]を選択した。「常設展示」とは、美術館自身が所蔵する美術品で構成された展示・展覧会である。海外美術館も含めた他の美術館・個人所蔵家など、他の所蔵者から作品を借り受けて構成される展示・展覧会、いわゆる「特別展・特別企画展」と「常設展示」が異なる点に注意してほしい。多くの場合、一般の美術館見学者は「特別企画展」を見ることを目的とする。その入場券に「常設展示入場券」が付属していたので、ついでに「常設展示」を見た・鑑賞した、という人は多いだろう。「ジウセツテンジって何のこと？」という反応も少なくない。「常設展示」という言葉が理解されていない状況は、公金を費やして収集・保存された美術品からなる市民の財産の展示、地域の文化・芸術の伝統や現在を垣間見ることのできる展示、地域とともにある美術館の個性や特質を示す重要な展示、といった「常設展示」の意義や重要性が、日本の人々の意識に浸透していないことを物語る。

欧米を観光旅行した日本人の多くは、美術館を訪れて感銘を受ける。だが、欧米美術館の展示の大部分が「常設展示」あるいはコレクション展示、つまり収集品・所蔵品の展示であるという点に気づいていない人も非常に多い。欧米美術館の多くは、欧米地域における文化芸術の歴史と伝統、その産物としての美術品を「常設展示」しているのである。では、日本における地域の美術の歴史と伝統、そして現在を知るための場はどこなのか。答えは簡単だろう。美術館・博物館であるはずだ。それも、期間限定で開催される特別企画展ではなく、本来は「常設展示」においてこそ、その美術館がある地域の美術文化の実情、歴史と現在とが垣間見られるのである。一見すると地味な展示かもしれないが、学校見学において「特別展」ではなく「常設展示」を重視する具体的な理由には、次のような事柄が挙げられるだろう。

「常設展示」を重視する理由：準備実務と鑑賞教育の質をめぐる基本条件の確保

1) 作家の回顧展や一時期の美術動向に関する展示など、限定的で専門性の高い視点で構成された特別企画展に比べれば、所蔵品を紹介する形でおこなわれる「常設展示」では、多くの場合、彫刻・絵画・工芸・デザインなど、多種多様な形式の美術作品を見ることができる。会場演出も控えめな「常設展示」では、初学者も児童生徒も「作品を集中して見る」、または「飽きずに色々なものを眺める」ことができる。

2) 「特別企画展」の開催期間は1～2ヶ月と比較的短期間の開催であり、展示内容に関する事前学習や見学プログラムの充実をはかるうえで、学校側の準備が不足しやすい。これに対し、「常設展示」は比較的開催期間が長く[年間を通じて常設、または2～3ヶ月の常設展示を年数回など、美術館によって状況は異なる]、学校側の準備に余裕がとれる。学校の教師は、かなり早い時期から美術館の「所蔵品目録」などで作品図版を事前に見て調べることができ、そうした事柄を学校での事前学習や授業計画内容にも活用することができる。鑑賞教育・鑑賞指導の質や効果を問うならば「常設展示」を優先するほうがよいだろう。

「常設展示」における鑑賞教育指導の社会的意義と必要性

1) 所蔵品展示の見学では、美術館のある地域とその住民が培ってきた共有の美術文化財産にふれ、共感や理解を深めることができる。これは平成10年度の「指導要領」にも強調されている「伝統文化に対する理解」と連関する教育効果である。むしろ、日本の美術館は主として近現代美術を扱うことが多いため、この場合の見学先としては歴史博物館などが優先されることにもなるだろう。だが、地元の明治以降の美術やコンテンポラリー・アートに関する経験や知識の有無もまた、カルチュラル・アイデンティティやローカル・アイデンティティの形成に大きく関わっている。したがって、図画工作・美術科教育としては美術館における「常設展示」見学を重視するべきであろう。長期的観点に立てば、常設展示の見学・鑑賞体験は、その地域における住民・人々の鑑賞眼や批評能力を高めることにつながり、美術文化の興隆に寄与するものである。

2)「常設展示」見学は、美術文化財を収集・保存し公開・展示する研究機関、社会教育施設としての美術館の基本的な役割について理解を深めてもらうための重要な教育機会である。「私たち市民の美術館、私たちの美術品」として鑑賞を楽しみ、美術館を利用することを学ぶうえでは、比較的落ち着いた「常設展示」を見学するほうが、美術館の実態や本質がよく見え、よくわかる。また、美術館内での見学者マナーを身に付けてもらうこと、大人の「美術愛好」のたしなみや「美術館」の仕組みについて生徒児童にできるだけ理解してもらうことは、義務教育段階における図画工作・美術科教育が担う重要課題のひとつである。「特別企画展」に散見される一時的な華やかさを避けて、「常設展示」を主目的として美術館を見学することの意義や目的を、学校教師は十全に意識しておく必要がある。

なお、本ページでは、鑑賞教育が生徒児童個人にもたらす効果、感性の育成や人格陶冶といった個人の育成教育の効果を論じることをあえて避けることにした。そもそも、深い芸術体験・美的経験とは個人の内面において獲得されるものだろう。他方、学校団体見学における鑑賞教育は、集団における鑑賞経験である。一定のプログラムや集団行動のルールのもとでおこなわれる学校児童団体の鑑賞指導において、児童個人の内面的経験にまで深くたちいることには限界もある。そこで、ここでは個人教育の理想論を展開するのではなく、むしろ、それに代わる別の視点として、社会的な行政施策としての学校教育という観点から、「常設展示」を見学することの具体的な意義、さらには「常設展示」団体見学における鑑賞教育の意義と必要性とを強調しておく。

美術文化の振興と美術館の充実に寄与する教育施策としての「鑑賞指導」

わが国の美術文化行政・美術教育上の課題として、美術館における「常設展示」と市民・生徒児童との関わりを強化することは、2003年現在においても、もっとも大きな課題のひとつとなっている。その事情について、以下に簡単な補足説明をしておこう。

19世紀後半の世界万国博覧会の流行に影響を受け、明治以降または第二次世界大戦後に数多く設立された日本の美術館は、その歴史的経緯ゆえに所蔵品も乏しかったため、特別企画展の運営をひたすら強化してきた経緯を持つ。戦前戦後に日本の新聞社・放送局が主体となって開催された数々の「特別展・企画特別展覧会」は、社会啓蒙と教育という点で大きな効果をあげた。だが、そうした事情の中で所蔵品の収集と「常設展示」が軽視されやすい傾向、市民が「常設展示」をかえりみないという状況を生じたことも否めないだろう。

新聞社・放送局主導で開催された「特別展」の本質的な意図や動機のなかには、社会教育や美術文化の振興という正当な理由目的のほか、新聞社や放送局をめぐる悪いイメージの改良という宣伝戦略の意図があった。教養主義の文化事業として、海外美術を紹介する特別展などを開催することで、新聞・放送各社は自社の社会的な信用や品格を高めたのである。また、美術館の側は、新聞社・放送局の強力な要請と実務上のバックアップを得て、それに応える形で「企画特別展」を華やかに展開し続けることができた。だが、これらはおおむね「特別展示・特別企画展」に関して生じた現象であり、欧米美術館のように質・量ともに充実した「常設展示」、地元出身の美術家の作品に眼を注ぐための「常設展示」の発展に結びつくものではなかつたといえよう。美術館の本質的な存在意義のよりどころであるはずのコレクション、所蔵品の「常設展示」について、新聞社・放送局が関与することは現在もわずかしかない。強力な宣伝によって「特別展」ばかりが脚光を浴びてきたために、「常設展示」の整備や充実はたち遅れがちである。現在も、一般市民は「常設展示」の存在や意義について知られることが少なく、その名称すら知らない人がいる、という状態に陥っているのである。

さて、欧米の美術館は豊かな所蔵品の「常設展示」ゆえに高く評価され、館自体の名声を高めてきたほか、欧米の文化と歴史的伝統についての理解や肯定的評価を強化することに寄与してきた。所蔵品の「常設展示」は、その美術館の本質的な価値や個性、名声の礎となるほか、地域の美術文化とその歴史を称揚する作用を持つのである。しかも、常設展示を見て美術館を評価し、地元の文化芸術を学ぼうとする市民が増えることは、美術館の常設展示の充実、地元の美術文化の興隆と相関的な比例関係にある。美術を愛好する高い意識をもつ人々は、美術館や「常設展示」のさらなる充実を求め、なおかつ、地域における美術文化の振興を担う人々でもある。つきつめていうと、美術館における「常設展示」の質とその享受・鑑賞のされ方、見学する地域市民の数自体が、その国・その地域における美術・芸術文化の水準をはかるバロメーターのひとつなのである。

現時点において「地味だ・面白くない」と思われるにしても、日本とその各地域における美術文化の水準をはかるバロメーターとして、私たちは堅実に地元の美術館の「常設展示」を見つめ、見直していく必要があるだろう。学校教育における図画工作・美術科教育関係者は、鑑賞教育や美術館見学の意義について、児童生徒個人の育成のほか、上述したような社会的な意義や効果が見込まれていることを認識しておいたほうがよい。地域あるいは日本の芸術文化振興をはかる地道な一歩として、学校教育は生徒児童に美術館見学の機会を提供し、可能な範囲で質の高い「鑑賞指導」をおこなう必要がある。とくに、「常設展示」を見学対象として選ぶことは、戦後の日本に定着してきた「丸投げ」あるいは「連れ込み」式の美術館見学から一歩さらに前進すること、より高い意識と周知な準備・新たな工夫を含んだ美術館見学・鑑賞教育指導の実践に取り組むことを意味するものでもある。

これからの美術館見学における学校児童と教師は、もはや「無言の羊と無教養な羊飼い」であってはならないだろう。むしろ、団体鑑賞・団体見学者としての学校児童と教師とは、各人が主体的に見つめ、自由を考えて意見を述べ合うことでさらに互いの鑑賞体験を高めていくような、かなり知的な鑑賞批評のグループとなりうるのである。美術館見学を鑑賞指導の機会とみなす学校教師の本来の目的は、鋭敏な年若い世代の人々つまり生徒児童を、中身のある鑑賞・美術批評体験へと導くことである。

2. 兵庫県立美術館における常設展示

兵庫県立美術館は1970〔昭和45〕年「兵庫県立近代美術館」として開館、日本と海外の彫刻、近代版画および郷土ゆかりの美術品の収集につとめてきた。その後1995年の阪神淡路大震災による被害を契機として、王子公園から埋立地のHAT神戸へと建物を新築・移転し、名称を「兵庫県立美術館」と改称したうえで2002〔平成14〕年4月に開館している。安藤忠雄設計の建築は、「常設展示」の重要性をよく理解した設計としても評価されるだろう。「特別展」用の「企画展示室」が3階に位置するのに対し、所蔵品展示のための6つの「常設展示室」、郷土ゆかりの作家作品を展示する「小磯良平記念室・金山平三記念室」は、よりアクセスしやすい1・2階に配されている。約7000点の所蔵作品を定期的に入れ替えながら公開・展示する「常設展示」は、地域における市民の教育と美術文化の振興に寄与するものなのである。



さて、本プロジェクトの見学対象となった兵庫県立美術館の常設展示「コレクション展Ⅲ」〔2004年11月27日—2005年3月13日〕について、その概要を以下に示す。

展覧会名称：「コレクション展Ⅲ 特集展示 館蔵版画大公開

小企画 グループ〈位〉展」

会期： 2004年11月27日—2005年3月13日

会場： 兵庫県立美術館1・2F（常設展示室1—5〔1F〕および

小磯良平記念室・金山平三記念室・常設展示室6〔2F〕）

展示内容： 兵庫県立美術館所蔵品を主とする美術作品全245点（関連資料を含む）

〔 絵画97点、版画作家作品63点、彫刻13点、震災復興関連の美術30点
1960年代後半の神戸における前衛美術作品と関連資料展示42点 〕

合計8つの広大な展示室空間に245点の作品・資料を「常設展示」として公開する「コレクション展Ⅲ」には、「特集展示」や「小企画」が含まれている。漫然とした所蔵品の紹介展示とは異なる工夫、緻密な一定の企画性がみられることも高く評価されるだろう。 [喜多村明里]

資料

第6学年 図画工作科学習指導案 (第1案)

指導者 榎田悦司 服部英雄 新名主洋一
中田高俊 足立奈緒子
学 年 第6学年児童79名
日 時 12月22日(水)
場 所 兵庫県立美術館

- 1 題材名 「なりきり天才芸術家～美術館で鑑賞しよう」
- 2 目標 美術館の作品に興味・関心を持ち、自分が好きになった作品について語ったり、記述に表したりする。
- 3 展開

学習活動	予想される児童の反応	指導者の関わり
1 鑑賞の目当てについて確認する	<ul style="list-style-type: none"> 自分には美術作品が理解できるかという不安。 好きな作品が見つからなかったらどうするかという疑問。 	<ul style="list-style-type: none"> 理解するのではなく、何となく好きになるだけでも充分に鑑賞であることを意識づける。
2 グループごとに館内を鑑賞する	<ul style="list-style-type: none"> 自分が気になる作品を見つけよう グループごとに作品を見て回りながら心に引かれた作品の作者などをチェックしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> もう一度じっくり見たい作品をシェアさせながら館内の作品を鑑賞させる。 子どもたちのつばやきに対して共感したり、作品の背景について簡単に解説したりする。
3 クラスごとに初めの鑑賞の印象を記述して語らう。	<ul style="list-style-type: none"> 気になる作品と気になる理由を語る 友だちの鑑賞のポイントやつばやきについても発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発言に対して、ポイントやつばやきを色・構図・靈感など整理して全員に共有させる。
4 気になる作品をじっくり鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> 気になる作品と再び語り合おう 作品について、自分なりの観点でメモをしたり、つばやいたりする。 同じ作者の別の作品にも関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちのメモやつばやきに対して共感したり、作者のことや作品の背景について簡単に解説したりする 作品そのものの印象だけでなくいいし、作者のことや作品の背景を含めてのまとめを伝える
5 鑑賞のまとめをする	<ul style="list-style-type: none"> 自分が気に入った作品について、作者のことや作品の背景などをまとめて自分なりの解釈をしようとする。 まとめをもとに、自分なりの言葉で語ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの記述から、複数あったものを中心にグループトークを行う。

資料

第6学年 図画工作科学習指導案 (第2案)

指導者 榎田悦司 服部英雄 新名主洋一
中田高俊 足立奈緒子
学 年 第6学年児童79名
日 時 12月22日(水)
場 所 兵庫県立美術館

- 1 題材名 「なりきり天才芸術家～美術館で鑑賞しよう」
- 2 目標 美術館の作品に興味・関心を持ち、自分が好きになった作品について語ったり、記述に表したりする。
- 3 展開

学習活動	予想される児童の反応	指導者の関わり
1 鑑賞の目当てを確認する	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な注意事項を知る。 「美術館での鑑賞はどうするのだろうか?」「好きな作品が見つからなかったらどうするのだろうか?」 	<ul style="list-style-type: none"> 美術館でのマナーなどを説明する。 作品の解釈や背景の理解も大切であるが、好きな作品を見つけてその理由を言葉にできることが鑑賞としてもっとも大切であることを意識づける。
2 グループごとに鑑賞とグループトークを行う。	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに作品を見て回りながら心に引かれた作品の作者などをチェックしていく。 鑑賞しながら、つばやいたり、友だちのつばやきに反応したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○10分ごとのローテーションを組んで、それぞれのエリアから選んだ作品の1点について鑑賞の観点や作品の背景などを提示する。 ○小磯良平、金山平三など日本の近代絵画 ○グループ「位」などの前衛美術 ○現代の版画
3 クラスごとに初めの鑑賞の印象を記述して語らう。	<ul style="list-style-type: none"> 気になる作品と気になる理由を語る。 友だちの鑑賞のポイントやつばやきについても発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発言に対して、鑑賞のポイントを色・構図・靈感あるいは作品の背景など整理して全員に共有させるようにする。
4 心に引かれる作品をじっくり鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> 心に引かれる作品とじっくり語り合おう 作品について、グループトークを元にした観点で記述をしたり、自分なりの観点でメモをしたりする。 心に引かれた点や、好きになった理由を言葉や記述にあらわす。 	<ul style="list-style-type: none"> 作品そのものの印象だけでもいいし、作者のことや作品の背景を含めてのまとめでもいいことを伝えておく。 理由付けの大切さを意識づける。
5 鑑賞のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの印象で作品を解釈しようとする。 自分が気に入った作品について、作者のことや作品の背景などをまとめて自分なりの解釈をしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの記述から、複数あったものや独自の観点での記述があったものを中心に鑑賞のまとめを行う。

附属小学校作成指導案（2種）とその選択決定について

1. 本校における表現と鑑賞の実態について

本校図画工作科では、「イメージ」「材料」「造形的な行為」「鑑賞」をカリキュラムづくり、授業づくりの観点として取り組んできた。この4つの観点は、子どもの造形活動の中で相互にかかわり合うものである。私たちは、このかかわりを通じて、子どもたちの表現と鑑賞の力が高まるものであると捉えている。しかしながら、これまでの鑑賞の捉え方は、あくまでも造形活動における表現を前提としたものであった。すなわち、鑑賞へのアプローチとしては、表現の変容から子どもの鑑賞が高まっていることを読みとるか、造形活動における子どもたちの記述や語りによって子どもの鑑賞の視点を探ることかが中心となっていた。したがって、鑑賞そのものについての純粋なアプローチは、これまではほとんどなかったといえる。

対象の本校6年生は、多少おとなしい印象を受けるが、全体の場でも発言できる力を持っている。本校の子どもたちのマナーも低下してきたと指摘される面もあるが、公共の場では、緊急を要するほどの事態は起こらないであろう。また、絵画における描写の力は、本校の子どもたちの弱いところであるが、デザイン的な造形に関しては、かなりの力を持っている。このような特性を踏まえ、初めの諸注意は、要点を押さえておけば、それぞれの子どもたちが自ら美術館での振る舞いを考えるであろうし、ギャラリートークは、初対面の方が進めたとしても成立するであろうと考えた。また、作品への興味や関心は、絵画や彫塑における具象的な表現だけでなく、抽象表現、デザイン的な表現や現代アート、アバンギャルドにも強くあらわれることが予想された。

2. 指導案（1）の作成にあたって

本校図画工作科は、子どもたちそれぞれに学ぶ道筋があり、一人ひとりが迷ったり道草を食ったりもしながら、指導者とともに学びの道筋を残しながら頂上へとたどりつく登山型のカリキュラムを提案している。それは、指導者が引いたレールの上を全員が列車のように連なって学習内容を消化していくものではない。指導する側としては、列車型の方が都合がよいのであるが、それでは、子どもの学ぶ道筋に即した学びとはいえない。ただし、登山型の学びを展開するためには、その学びに関わる指導者一人ひとりに、子どもたちへのきめ細かな観察と適切なはたらきかけが要求される。まだ面識もない多くの人々が指導者として関わるプロジェクトであるだけに、これらの点については測りかねるものがあった。

以上のことを踏まえ、美術館において、子どもたちがどのような学びの道筋をたどるのかをシミュレートしながら指導案（1）を作成することとした。

- ① 挨拶やスタッフの紹介、館内でのマナーなどについてのオリエンテーションをおこなう。
- ② 子どもたちが15分間～20分間ほど自由に鑑賞をして、一人ひとりが、気になる作品、気に入った作品を選出する。
- ③ 子どもたちの選出した作品を元に、その理由や作品の魅力などについて話し合い、ギャラリートークの対象となる作品を選出する。
- ④ 選出した作品についてスタッフを中心にギャラリートークを行う。
- ⑤ ギャラリートークで、鑑賞の視点や作品の背景などについての見識を得た上で、一人ひとりが15分間～20分間ほど自由に鑑賞をおこなう。
- ⑥ グループごとに集まって、まとめをおこなう。

この第1案においては、自由な鑑賞の場面でも、子どもの動きやつぶやきを拾いながら、作品への興味や関心を高めるような指導者の働きかけを必要とした。同時に、子どもの記述や発言についての評価の観点をあげた。

3. 指導案(2)の作成にあたって

第1案を作成した時点で、実際に県立美術館に赴くことにした。私自身が鑑賞をしていく中で、第1案が実現できるか不安になってきた。これだけの収蔵物に対して、80人以上の子どもの興味を集約することは難しいと感じた。大学教員と相談してみたところ、第1案のような取り組みは例がない上に、不安があるとの意見をいただいた。さらに、実現するためには参加予定者以上の多くのスタッフが必要であり、そのスタッフの一人ひとりに、たくさん作品への見識とギャラリートークの技能を要求することになる。実践に当たっては、事前にスタッフが、子どもたちに理解しやすい作品を選出しておき、ギャラリートークで、ある程度の鑑賞への視点や作品の背景などについての見識を持たせた上で、自由な鑑賞をするという、第2案作成の必要性を感じた。

- ① 挨拶やスタッフの紹介、館内でのマナーなどについてのオリエンテーションをおこなう。
- ② スタッフが選出した作品についてのギャラリートークを何カ所か用意し、グループごとにローテーションする。
- ③ ギャラリートークで、鑑賞の視点や作品の背景などについての見識を得た上で、一人ひとりが15分間～20分間ほど自由に鑑賞をおこなう。
- ④ グループごとに集まって、まとめをおこなう。

この第2案においても、自由な鑑賞の場面では、子どもの動きやつぶやきを拾いながら、作品への興味や関心を高めるような指導者の働きかけを必要とした。また、同じく子どもの記述や発言についての評価の観点をあげた。

4. 指導案の選択決定について

参加者全員で県立美術館の常設展示を鑑賞し、学芸員のレクチャーを受けた。美術館が提示した鑑賞教育の大まかな流れは、ほぼ第2案に近いものであった。その後参加者に第1案、第2案を提示し、作成の意図とスタッフの役割など内容についての簡単な説明をおこなった。

討議の中で、学芸員、大学教員、大学院生それぞれから出た意見を集約すると、「第1案の意図は理解できるし、鑑賞のあり方としては理想であるが、今回は、第2案の方が実践にふさわしいものであろう。」ということであった。

結論として、第2案をもとに、実践をおこなうということになった。そこで、常設展示から作品の選出に取りかかった。スタッフ全員が常設展示を鑑賞し、子どもの興味や関心を想定しつつ、ギャラリートークを展開させやすい作品選び、大学で集約することになった。

5. 成果と今後の課題

附属小学校としての理念、本校図画工作科の方針を踏まえるならば、第1案である。これが実践できないのは、鑑賞教育というものが小学校に文化として根付いていないことの証でもある。また、美術館も学校現場との連携を深めつつ、より子どもの学ぶ道筋に寄り添った鑑賞教育の在り方を模索することが求められるであろう。学校と美術館との間にそれぞれ独自の文化があり、譲れないものもあるが、美術教育に携わっているということでは立場は同じである。よりよい連携を積み重ねるための実践例として、この取り組みが今後も活かされることを願ってやまない。

[中田高俊/兵庫教育大学附属小学校教諭]

資料 トーク実践のための作品選択（第1次）

展示内容を見下した院生・参加者12名が、「印象に残った作品」または「鑑賞指導としてのギャラリー・トークの題材に適する・希望する作品」として列挙した作品は下記の通りである。

冒頭の数字は、その作品を挙げた人数を示す：

《版画》

- 1 一 駒井哲郎 《孤独な鳥》
- 1 一 長谷川潔の諸作品
- 1 一 浜田知明 《初年兵哀歌 歩哨》
- 1 一 池田満寿夫の諸作品
- 1 一 斉藤義重 《ボオバンA白》



《1960年代神戸の前衛美術》

- 1 一 グループく位 <《寄生虫》シリーズ>



《彫刻》

- 1 一 ロダン、オーギュスト 《オルフェウス》
- 3 一 ブランクーシ、コンスタンチン 《新生》
- 1 一 アルプ、ジャン 《陽気なトルソ》
- 1 一 ダイン、ジム 《植物が扇風機になる》連作
- 3 一 シーガル、ジョージ 《ラッシュ・アワー》
- 1 一 新宮晋の諸作品
- 1 一 ナウム・ガボ 《構成された頭部No.2》



《絵画》

- 3 一 小磯良平 《斉唱》
- 1 一 小磯良平 《ラッパ》
- 1 一 金山平蔵 《大石田の最上川》
- 2 一 本多錦吉郎 《羽衣天女》
- 1 一 坂田一男 《女と植木鉢》
- 1 一 安部合成 《見送る人々》
- 2 一 津高和一 《母子像》
- 2 一 白髪一男 《地傑星醜群馬》



ギャラリートーク実践のための作品選択決定について（第二次）

前ページにあげた第一次の作品選択には個人的な趣味判断も反映される。だが、この点が重要だということ
を付記しておこう。美術史研究や美術批評の専門家も、みずからの興味や関心をそその作品を論じ、批評・研
究しているのである。ギャラリートークの指導者もまた、取りあげる対象作品に対する一定の興味や関心、愛
情なくしては十分な指導をおこないえないだろう。また、細部や全体の特徴について言葉にしやすい作品を選
択しておくことは、ギャラリートークの実践指導者にとって大切な条件である。

くわえて、下記のような実践上の具体的な条件を考慮しなければならない。

1) 「常設展示」の内容特性を踏まえた多様な作品選択であること。

「コレクション展Ⅲ」における展示内容の多様性に配慮するならば、版画・絵画・彫刻作品ならびに神戸
の前衛美術グループ〈位〉の作品を取り上げることが望ましい。

2) 一空間・一展示室内に複数の見学グループが同居する状態を避けること。

音声の反響や競合は、生徒児童の精神的集中の妨げとなる。したがって、作品選択には作品の展示位置と
空間に関する配慮が必要であり、また、多人数で鑑賞する場合には、実践または物理的な要件として、サ
イズが比較的大きく造形特徴も見えやすい作例を選ぶことが重要となる。

3) ギャラリートークの指導実践上、望ましい条件として、児童の人数は1クラスを二分した15-20人以内 とする。今回は3クラス×2＝合計6グループのため、作品6点を選択する必要がある。

上記の諸条件を院生・教員で合議した結果、院生による第一次の作品選択と、教員による選択案とを組み合
わせて下記の6作品を選択し、ギャラリートークを担当する院生を定めた。齊藤智の作品が選択されたのは、
参加者のなかに齊藤智氏の教え子がいたためである。なお、児童の各グループがギャラリートークを2回経験
すること、トーク指導の担当院生は担当作品について2回ギャラリートークを行なうこととした。この決定
(12月8日) から実際の見学訪問(同22日)までの2週間が実質的な準備期間となる。

《ギャラリートーク・プログラムと分担》 □＝附属小学校教諭 ■＝兵庫県立美術館市民ボランティア

	場所	作品	ギャラリートーク担当者 ＋補助学生	小学生グループ 11:00 11:30	補助 移動誘導
①	展示室3 (1F 版画)	齊藤智 《無題C》	和田健一・栗林ゆか 伊藤美智子	1-A → 2-A	初田
②	展示室4 (1F グループ位)	グループ位 《寄生虫》シリーズ	戸澤由子 佐藤以都子 臼井善隆 多鹿宏毅	1-B → 3-B	喜多村 ■ クラス担任
③	展示室5 (1F 彫刻)	ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》	高瀬城作 中田高俊 廣田志帆 中溝梓	2-A → 1-A	山本 ■
④	展示室5 (1F 彫刻)	ブランクーシ 《新生》	斎木敦智 松原絹江 浜本由愛	2-B → 3-A	喜瀬 ■ クラス担任
⑤	小磯記念室 (2F 油彩画)	小磯良平 《斉唱》	敷島希絵 天津さおり 植田・足立	3-A → 1-B	森岡 ■
⑥	展示室6 (2F 油彩画)	本多錦吉郎 《羽衣天女》	武井二葉・熊谷美智代 河合真奈美	3-B → 2-B	大西 クラス担任

**12月15日（水）本学附属小学校児童6年生のための「事前学習」
教育実践演習「兵庫県立美術館へ行こう！」（15分）
（実施者：本学院生7名）**

■タイムスケジュール

14:30 附属小学校正門前に集合、同小多目的室へ
プロジェクターの設置と映写状態確認

14:55 6年生児童の集合、着席

15:00 図画工作科専任教諭・中田高俊先生による挨拶と本学院生の紹介

15:05 事前学習「兵庫県立美術館へ行こう！」（約15分）

代表院生1名による視覚資料（Power Pointファイル）の提示とお話
児童に対する事前アンケート調査

15:30 終了

使用機器：デジタルプロジェクター1台

Power Pointファイル「兵庫県立美術館へ行こう！」[院生成品]

配布物：美術館見学の予定と持ち物一覧 [B5×1枚・教官+院生成成]

*事前調査用の簡易アンケートを含む

1. 事前学習の準備

本プロジェクトでは、「事前学習」において大学院生と子どもたちとがはじめて出会うこととなる。「事前学習」は、子どもたちにとっては美術館来館への期待を高める機会であり、大学院生にとってはトークを行うに先立ち子どもたちの実態を把握する場となる。

12月8日の「鑑賞教育論」の授業において、事前学習にむけての打ち合わせをおこなった。

検討事項は次の通りである。

① 事前学習の意義

② 事前学習の内容

- ・スライドショーの内容
- ・事前学習当日配布資料及び鑑賞会当日配布資料（ワークシート）の形式・内容
- ・事前アンケート及び事後アンケートの質問事項

附属小学校では、美術館へのアクセスが不十分な為、来館経験者数がさほど高くはないと予想された。そこで、事前に鑑賞会への興味や期待感を高めておくとともに、美術館での基本的なマナーの教示をおこなう必要性が確認された。ただし、禁止事項の説明に偏らず、兵庫県立美術館の特徴や所蔵作品の紹介などを交えることによって、子どもたちに鑑賞会のイメージをもたせることが重要であるとの立場から、スライドショーの内容が検討された。結果、喜多村助教授の原案を、現職大学院生の担当者が、子どもに親しみやすいレイアウトや文言に改良するという事となった。

また、ワークシートについては、初田・上浦の原案が検討されたが、41頁に述べるように、質問項目の順序を入れ替えることとなった。

アンケートについては、美術鑑賞に対する好感度の変化が事前・事後で把握できること、再来館への意欲の高まりが把握できること、また、子どもが答え易い様に出来るだけ単純な設問にすることなどが確認された。なお、事前学習当日の配布資料は下のとおりである（事前アンケート書式・回答集計は25頁に掲載）。

美術館探険に行こう!

兵庫県立美術館・常設展

★ 12月22日に、6年生全員で兵庫県立美術館に行くことになりました。たくさんの美術作品にふれることができます。楽しく、思い出に残る鑑賞会にしましょうね!

●日時 平成16年12月22日

●場所 兵庫県立美術館(芸術の館)

●持ち物 ○鉛筆、色鉛筆(筆箱に入れる) ○下敷き ○ココロカード ○弁当 ○水筒
○敷物 ○リュックサック ○ゴミ袋 ○ハンカチ ○時計 ○雨天の場合は雨具

★美術館は公共の宝物です。作品を大切にすやさしい気持ちで鑑賞しましょう。
また、美術館では他のお客さんの迷惑にならないように気をつけましょう。

- 1、作品にさわらない。美術作品をみんなで守ろう。
- 2、館内では走らない。危ない!
- 3、大声を出さない。まわりの人の迷惑を考えよう。
- 4、マジック、消しゴムは使わない。鉛筆だけOK。
- 5、知りたいことは先生にたずねてみよう。

8:30	10:15	10:30	11:00	12:00	1:50	2:00
集合	美術館 到着	ガイドス	ギャラリー トーク	昼食	昼食をすませた 人から、自由鑑賞	バス乗車

2. 事前学習当日

先に挙げたスケジュール通りに事前学習が進められた。

代表院生は中学教師である為、小学生への対応にそなえた準備をおこなってきたようであり、ユーモアも交え、子どもに即したわかり易い語りでスライドショーを展開していた。美術館についての説明、所蔵作品の紹介、美術館でのマナーなどが主な内容であったが、子どもたちも興味を持って聞き入っている様子であった。附属小学校の子どもたちは日頃から来客には慣れていることもあり、初対面の院生、教官に対しても物怖じすることなく、代表者の質問にも積極的に手を挙げて答える場面も見られた。

事前学習終了後の話し合いでは、子どもたちの話の聞き方、発表の仕方を見る限り、ギャラリートークでの活発な意見交換が期待できること、子どもたちの学習期待の高まりも伺えることなどが確認された。

子どもたちとの出会いは概ね良好であったといえる。

なお、当日は学校行事と重なっていた為、担任教師1名を含め、全員が事前学習に参加することはできなかった。大学、附属小学校間でのスケジュール調整が今後の課題となった。

[初田隆/実技教育研究指導センター]

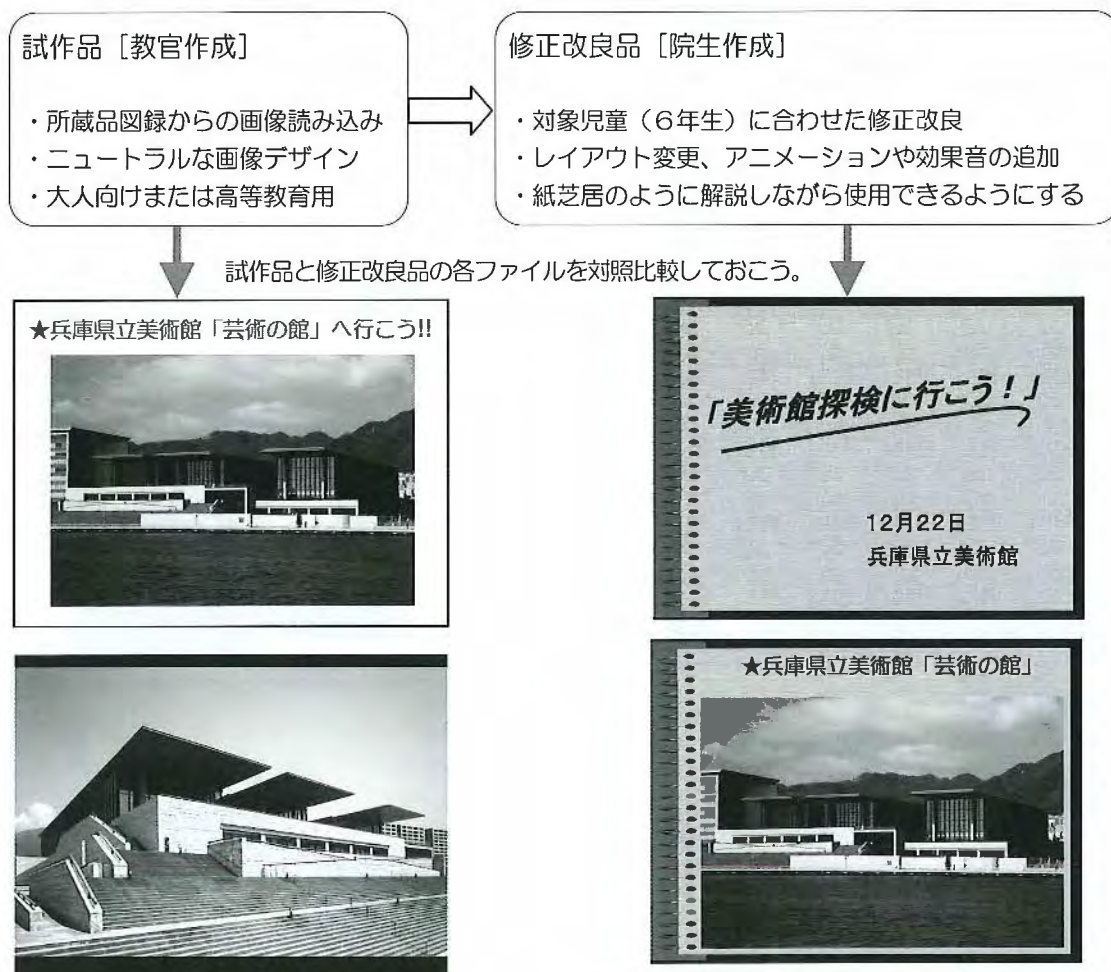
事前学習用PowerPointファイルの制作（第1次・第2次）

事前学習を15分という最小限の時間に限定した場合でも、内容として必要とされる事柄は複数ある。

- ① 訪問先の美術館の紹介（建物／歴史／美術館の役割……選択）
- ② 所蔵品または見学予定となっている展示内容の紹介（名品／展示中の作品／美術品の多様性……選択）
- ③ 団体見学あるいは鑑賞における一般的なマナー・ルール
 - 1 作品に触らない……………（美術品の保存のため）
 - 2 展示台・ケースやガラスに触らない……………（展示設備の汚損を避けるため）
 - 3 壁にもたれない……………（同上、仮設壁にもたれることは危険である）
 - 4 走らない……………（美術品の保存と館内の安全のため）
 - 5 大声を出さない……………（一般来館者に迷惑をかけない）
 - 6 マジック・ボールペン類の使用禁止……………（美術品の保存のため）
 - 7 消しゴムの使用禁止……………（美術品の保存と館内の清浄維持のため）
 - 8 ソファや椅子にはなるべく座らない……………*学校団体見学専用のルールとして。これは一般来館者に対する配慮として求められる。

とくに重要とされるのは「③見学・鑑賞する際のマナー・ルール」である。その大部分は一般来館者と共通するルールだが、こうした美術館におけるルールの理由や原則を、義務教育段階の児童・生徒に教えておくことが重要である。ただし1-8項目を一度に覚えることは難しいため、項目数を減らして簡略化しながら繰り返し周知する必要がある。事前学習のほか、見学当日の冒頭でも繰り返し理解させる必要がある。

さて、上述の事柄を適度にまとめて、事前学習用の画像提示教材としてPowerPointファイルを作成した。実際的要領は以下の通りである：



(続き)

試作品 ↓



設計: 安藤忠雄

兵庫県立美術館「芸術の館」

沿革:

1970(S45) 兵庫県立近代美術館 開館
Hyogo Prefectural Museum of Modern Art

1995(H7) 阪神・淡路大震災

2002(H14) 兵庫県立美術館「芸術の館」開館
Hyogo prefectural Museum of Art

所蔵品: 近代彫刻 / 近代版画 / 郷土ゆかりの美術
現代美術
(総計約7000点)

↓ 修正改良品



設計 安藤忠雄



小磯良平
《斉唱》
1941(S16)



小磯良平
《斉唱》
1941(S16)



ジョージ・シーガル
(1924-2000)

《ラッシュ・アワー》
1983年
石膏・着色
183.0 x 244.0 x 244.0cm



ジョージ・シーガル
(1924-2000)

《ラッシュ・アワー》
1983年
石膏・着色
183.0 x 244.0 x 244.0cm

(続き)

試作品 ↓



↓ 修正改良品



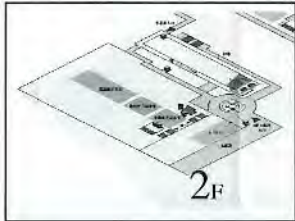
展示中・非展示中のものも含めて
美術館の主要な所蔵品を見せる



美術品の多様性を示す



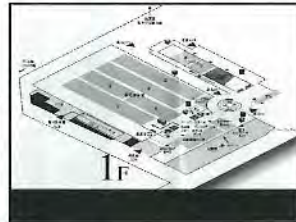
(続き) 試作品 ↓



5つの約束

④ マジック・消しゴムは使わない
鉛筆だけOK。
美術品をみんなで守ろう！

⑤ 知りたいことは先生にたずねて
みよう！



5つの約束

① 作品にさわらない：
美術品をみんなで守ろう！

② 走らない：危ないから。

③ 大声を出さない：
他のお客さんもいるから。

建物図面を示す
館内でのマナー・ルールのお知らせ

5つの約束：将来、大人になるために。

① 作品にさわらない：美術品を守ろう！

② 走らない：危ないから。

③ 大声を出さない：他のお客さんもいるから。

④ マジック・消しゴムは使わない
鉛筆だけOK。美術品をみんなで守ろう！

⑤ 知りたいことは先生にたずねてみよう！

一方的に禁止事項を
教え込むのではなく、
マナー・ルールの理由を
説明することが
重要である



(試作品：計21枚/おわり)

5つの約束

① 作品にさわらない
美術品は人類の財産。みんなの手で守りましょう。

② 走らない
走ると危険。自分も、他の人も、そして作品も。

③ 大声を出さない
騒がしいのは、とにかく迷惑。公共の場所です。

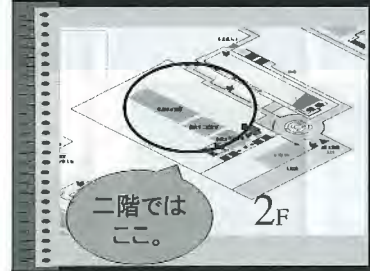
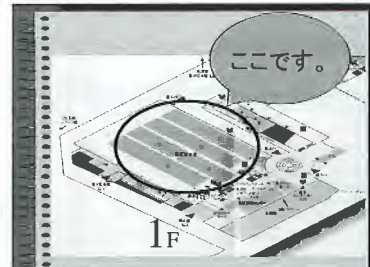
5つの約束

④ マジック・消しゴムは
使わない
思わぬところで、作品に影響が……。
でも、鉛筆だけはOKです。

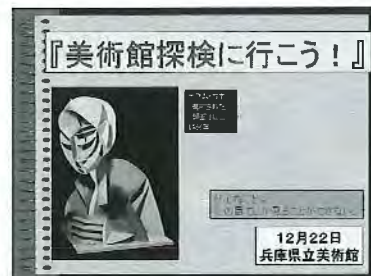
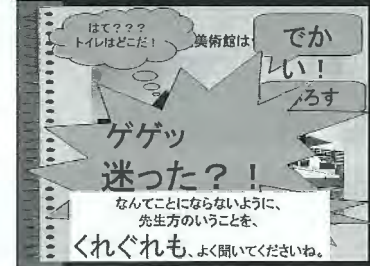
⑤ 知りたいことは、
どんどん先生にたずねよう。

視覚的提示では
子どもの感覚に訴える工夫が必要である。
改良品では大部分の文字にアニメーションや音響効果が
加えられた。デザインセンスが求められることはいうまでもない。

↓ 修正改良品



展示室は、ほかにもあるのですが……
今回はムリです。
広すぎて時間が足りません。
また、お家の人と見に行ってください。



(修正改良品：計22枚/おわり)

資料 一事前アンケートの書式と回答結果

1. 事前アンケートの書式

本ワークショップにおいて、兵庫教育大学附属小学校6年生対象におこなわれた「事前学習」の際、その直後に配布された「事前アンケート」は、本学の美術講座と実技教育研究指導センター美術教育分野の教員によって、制作・実施された。内容を以下に示す。

★次の問いに答えてください。

1. 美術鑑賞は好きですか？

嫌い あまり好きではない どちらともいえない どちらかというが好き とても好き

2. これまでに美術館に行ったことはありますか？

全くない(0回) 1,2回 3,4回 5,6回 7回以上

3. 美術館へ行くのは楽しみですか？

楽しみではない あまり楽しみではない どちらともいえない どちらかという楽しみ とても楽しみ

4. 美術館へ行く目的がもてましたか？

あまりもてない あまりもてない どちらともいえない あるていどはもてた しっかりともてた

2. 回答結果

事前アンケートの実施結果は以下のとおりであった。

回答者：兵庫教育大学附属小学校6年生60名[学校行事による欠席＋未回収＝19]

問 \ 回答(※)	意識の度合い(評価)				
	低 ← ← ←				→ → → 高
	1	2	3	4	5
1.美術鑑賞好感度	3	4	16	28	9
2.美術館来館経	28	18	9	2	3
3.参加への期待	1	3	16	23	17
4.目的意識	1	5	11	42	1

※アンケート書式における回答の左から順に、1から5の5段階に分けた。

[上浦千津子／兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科]

事前アンケートの目的と統計結果に関する分析評価

1. 事前アンケート調査の目的

前掲の事前アンケートの設問項目は、以下の目的で本学教員によって作成された。

<選択式アンケート：問1>

「美術鑑賞」という言葉の意味を確認するとともに、児童の美術鑑賞への興味や関心の程度を、美術館への来館経験との関係において把握すること、本ワークショップの事後アンケートでの好感度調査との比較により、児童の意識変化を確認することなどを目的に設定された。

<選択式アンケート：問2>

美術館への来館経験は、児童をとりまく環境や価値観などとの関連があると思われるが、ここでは、児童の今までの経験を本ワークショップの実践に反映させることと、来館経験の有無が実践後の児童の美術館への来館意欲に差異をもたらしているかどうかを知るために設定された。

<選択式アンケート：問3>

本学大学院生による事前指導によって、美術館へ行って美術鑑賞を楽しむ意欲が持てたかどうかの成果を確認するために設定された。

<選択式アンケート：問4>

本学大学院生による事前指導によって、美術館へ行って美術鑑賞をする目的が持てたかどうかの成果を確認するために設定された。

2. 統計結果に対する分析評価および考察

アンケート回答からは、本学附属小学校の児童の美術館訪問経験があまり豊富ではないことがわかる。この調査では、半数近くの児童が、美術館へ行った事がないと回答している。現在の我が国における小学6年生の実態としては、意外な結果かもしれないが、兵庫教育大学附属小学校の位置する加東郡には美術館が無いことや、美術館への意識の低さの問題などの表れであるとも考えられよう。しかし、美術鑑賞への好感度や美術館訪問への期待度、今回のワークショップへの参加意識は、低くはない。これは、日常的におこなわれている小学校での図画工作での授業や、大学スタッフからの今回参加する小学生への事前指導によって、美術鑑賞や美術館への理解が、幾分、進められた事によるのではないと思われる。ただ、美術館を訪問した経験のある児童の方が、今回、初めて美術館を訪問する児童よりも、美術鑑賞への好感度が高かった（問1において、 χ^2 検定では $P < .005$ ）。美術館経験の多い児童ほど美術鑑賞が好きで、美術館経験の乏しい児童ほど、美術鑑賞に対する好感度が低いといえるだろう。

今回の実践で、美術鑑賞および美術館への関心がより一層高まることが期待されよう。また、普段児童が美術館に対してどのような意識をもっているのかについては明らかではないが、おそらく児童は、美術館に赴いた経験は乏しいとはいえ、興味・関心がない訳ではない。学校では美術館との連携による鑑賞学習を積極的に進めていくことや、家族でも可能な限り美術館を訪れるなどはたらきかけによって、児童の興味を喚起していくことが望まれよう。そこで、事後アンケートとの比較（42-44頁参照）により、本ワークショップの有効性を確認することの意味が浮上することになる。

[上浦 千津子/兵庫教育大学連合学校教育学研究科]

12月22日（水）附属小学校6年生の兵庫県立美術館団体見学と
 本学院生によるギャラリートーク実践指導演習
 [6年生79名+附属小教諭5+院生ほか22+大学教員6=102名]

■タイムスケジュール

8:45 小学生出発（バス3台、附属小学校発→大学へ）

8:50 院生・教官集合（事務局南側駐車場）

9:00 全体で出発（小学生のバス3台に院生・教員が同乗）

10:15 兵庫県立美術館に到着 北正面下車→東側を廻り（一般客に迷惑をかけないため）

南玄関から入ること。館内ミュージアムホールへ。

着席（荷物は座席の下に置くこと）+トイレ休憩

10:30 挨拶・説明（ミュージアムホール）

司会：中田高俊【附属小学校図画工作科教諭】

お話：相良周作【兵庫県立美術館学芸員】

- ・美術館とはどんなところ？
- ・館内での約束＝観賞マナーについて



11:00 鑑賞プログラム（A）＝ギャラリートーク（常設展示室ほか全8室/60分）

1) 同一展示室内に複数グループが同居しないようにする[音響と集中力の問題]。

2) 選択作品1点につき最低15分から20分程度の対話式鑑賞指導を本学院生がおこなう

目的：作品を見て1～2秒で終わるのではなく、言葉にすることで考えや感想を深めることを学ばせる・学んでもらうこと

*プログラム分担は次ページ別表を参照

3) 移動誘導・トイレ誘導は美術館の市民ボランティア（4名）の他、同行の学部生・自由参加者・本学教員で補助する

小学生3クラス÷2＝計6グループ
 児童15名以下/グループ+院生2～3名
 （約20分）×2回/展示室数＝8室



12:00 終了次第、各グループでミュージアムホールに戻り荷物をとる。

お弁当・荷物を持ち出して昼食に向かうこと。

12:00～13:00 昼食 最終グループと同行してお弁当を食べてください。

屋内飲食禁止 → 屋外の大階段（海側）、大屋根の下、近接する公園

雨天の場合 → 大屋根の下/バスに戻って食べる（北側玄関、下車した場所）

向かい側にある市立中学校や、近接の防災センターに場所提供の協力を求めることも可能であるが今回は協力要請をしなかった

《鑑賞プログラムA=ギャラリートーク運営表》

	11:00	担当院生	11:30	担当院生
1組-A	展示室3 (1F 版画) 斉藤智 《無題C》	和田健一 栗林ゆか	展示室5 (1F 彫刻) ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》	高瀬城作
1組-B	展示室4 (1F グループ位) 《寄生虫》シリーズ	戸澤由子	小磯記念室 (2F) 小磯良平 《斉唱》	敷島希絵
2組-A	展示室5 (1F 彫刻) ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》	高瀬城作	展示室3 (1F 版画) 斉藤智 《無題C》	和田健一 栗林ゆか
2組-B	展示室5 (1F 彫刻) ブランクーシ 《新生》	斎木敦智	展示室6 (2F) 本多錦吉郎 《羽衣天女》	武井二葉 熊谷美智代
3組-A	小磯記念室 (2F) 小磯良平 《斉唱》	敷島希絵	展示室5 (1F 彫刻) ブランクーシ 《新生》	斎木敦智
3組-B	展示室6 (2F) 本多錦吉郎 《羽衣天女》	武井二葉 熊谷美智代	展示室4 (1F グループ位) 《寄生虫》シリーズ	戸澤由子

《ギャラリートーク運営分担》

□=附属小学校教諭 ■=兵庫県立美術館市民ボランティア

	場所	作品	ギャラリートーク 担当者 + 補助学生	小学生グループ 11:00 11:30	補助 移動誘導 [教員]
①	展示室3 (1F 版画)	斉藤智 《無題C》	和田健一 栗林ゆか 伊藤美智子	1-A → 2-A	初田
②	展示室4 (1F グループ位)	グループ位 《寄生虫》シリーズ	戸澤由子 佐藤以都子 臼井善隆	1-B → 3-B	喜多村 □担当 ■
③	展示室5 (1F 彫刻)	ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》	高瀬城作 廣田志帆 中瀧梓	2-A → 1-A	山本 □中高俊 ■
④	展示室5 (1F 彫刻)	ブランクーシ 《新生》	斎木敦智 松原絹江 浜本由愛	2-B → 3-A	喜瀬 □担当 ■
⑤	小磯記念室 (2F 油彩画)	小磯良平 《斉唱》	敷島希絵 天津さおり 多鹿宏毅	3-A → 1-B	森岡 □植田・足立 ■
⑥	展示室6 (2F 油彩画)	本多錦吉郎 《羽衣天女》	武井二葉 熊谷美智代 河合真奈美	3-B → 2-B	大西 □担当

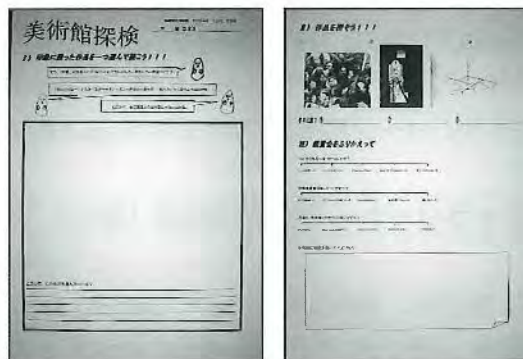
13:00 ミュージアムホールへ戻る（荷物を置く）→ 午後の部の挨拶＋ワークシート配布

ワークシート＋鉛筆・色鉛筆＋下敷きのみ持参させること

持ち物を確認、展示室内へ→グループは解除解散、児童個人の自由行動へ

13:00-13:50 館内見学B＝自由鑑賞

「美術館探検：
気になる作品を探そう」
（常設展示室ほか形8室）



↑ワークシート（表・裏/p.38-39参照）

- ・ワークシート使用
児童の質問に答える、当惑している
児童に話しかけながらワークシート
の記入を促すこと。
- ・迷子注意（展示空間から出ないこと）／トイレ誘導

展示室6
近代の日本画と洋画



13:50 小学生全体の再集合（ミュージアムホールへ）

13:50 終わりの挨拶（ミュージアムホール）

司会：中田高俊【附属小図画工作科教諭】

お話：相良周作【兵庫県立美術館学芸員】

- ・面白く鑑賞できましたか
- ・美術館にまた来てください、
行ってみてください
- ・子ども対象企画プログラムの案内

14:05：小学生＋教諭出発、帰途へ

→ 帰着13:15

- ・学生・教員はホールに戻る



14:05-16:00 院生・教員の感想反省会（レクチャールーム）

反省・自己評価アンケート記入の上、意見交換とディスカッション

16:00 院生＋教員の出発 → 17:10帰着・解散

【終了】

ギャラリートークの記録および考察

ギャラリートークの参加児童数は77名〔欠席2〕であり、附属小学校教諭5名、本学教員は6名、大学院生16名、学部生5名が同行した。まず、学芸員より美術館スタッフの紹介、美術館の役割、当日スケジュールおよび注意事項、などの説明を受けた。続いて、附属小学校教諭・児童および大学院生・学部生・大学教員は各自が担当するギャラリートークのための作品展示場所へ移動し、児童は、グループごとに1回20分弱のギャラリートークを2回、つまり2点の作品に関する鑑賞指導を受けた。以下は、その一部である。

ギャラリートークの内容記録（部分） 対象作品：ジョージ・シーガルの作品《ラッシュアワー》

(T：ギャラリートーク担当大学院生／C：児童14名)

T：座る前に、色んな方向から（この作品を）見てみよう。

T：そしたら、少し下がって、後ろの作品に気をつけて座ってください。人の気持ちも心も解るように、どんどん言葉にして表しましょう。ところで、さっき、学芸員さんがおっしゃっていた「手で掴めるもの」っていうのは何だったかな。

C：彫刻。

T：そうだね。じゃ、この作品を見て気がついた事は何かないかな。話してみて。いっぱい話して。どんなに小さい事でもいいよ。

C：顔の大きさが違う。

T：ということは、一人の彫刻じゃないな。何人いるかな。

C：6人。

T：6人の人かな。6人で一つの作品。他は。

C：見てると男みたいや。女みたい。

C：顔、男みたいやけど持ち物は女。

C：髪の毛みたら男。

T：履いているものは。一般的に、スカート穿いているのは女の人だね。じゃ、この人は。

C：男

T：なんで。うん。顔も服も。この人は。見えるかな。なるほど、服も、履物も持ってっている。動きは。歩いている感じがする。前は。後ろは。

C：足上げてない。

T：2番目の女の人はどう。

C：踵上げている。

T：一番目は。動きがある。並び方は。一直線じゃない。バラツとしている。

C：ピラミッド型。

T：色は。

C：皆同じ。

C：青が入っている。

T：どういう感じ。

C：悲しい感じ。

C：全体的な色が暗い。顔とかに沈んだ感じ。

C：眉間に横に皺が寄っている。

導入

(作品の観察)

美術作品の状態

- ・ 作品の構成
- ・ 作品の形状



- ・ 作品の動き
- ・ 作品の色彩
- ・ 作品の明るさ

作品から受ける印象

作品の表情・情緒
やニュアンス

T: 難しいな。表情でたよね。

C: 皆暗い。

C: 一番奥真ん中の人の口の形、こんな感じ(指で口の両端を下げる)。

T: 一番奥だけか?

C: 僕らから見て左。

T: (口の端が)下がってる。引っ張ってる。真ん中に。

C: ボンドでくっつけられた感じ。

T: なるほど。楽しい感じしますか。

C: いいえ。悲しい感じ。

T: どういうふうに。わからへん。どういう風を感じるかは各自の自由です。どんな感じがする。

C: サラリーマンが歩いとうみたい。

T: どこから、そう思うの。

C: 暗いから。

C: そういう人多い。というか、怖い顔して歩いている人が多い。

T: これ、題名ついてる。「ラッシュアワー」。意味分かる。電車の混み合う時間。通勤という目に見えにくいことを表している。目はどう。

C: (前に出て来て)つぶってる感じ。

T: そう。

C: あっちも。

T: みんなつぶってるかな。楽しそうかな。これは、口を閉じとかなあかんかった。石膏で実際に人の型とりをした作品なんです。だから、目も口も閉じた。どうしてもそうなった。

C: 本当に生きている人。

T: 「こんなん反則とちゃう」という人。(一名拳手)

C: 男か女か気になる。

T: 作者はこうしたいと思ったからあり?

C: ありと思う。

T: 君らは学校で、手を鉛筆で形どるような描き方しておられない?今まで、こういう事をした事が無かった。スゴイ作品になるね。スゴイな。普通に型とっただけじゃないな。一つだけ皆に聞きたい。「私としては、まあまあ好きかな」と思う人。(一名拳手。) どちらかというとなんか嫌いなという人。(数名拳手。)

C: 実物の方がもう少し明るい。

C: 表情が黒い。暗いから。

C: 全然嫌いでもないけど好きでもない。

C: 生活の作品として、もっと違う感じにした方が。微妙。

T: どちらでもないという人。(数名拳手)

C: 気持ち悪い。

C: 髪の毛がビニールみたい。

C: 不思議な感じが好きだから。

C: こんな、そのまますぎるのは好きじゃない。

T: この作品で見たように、色んなところまで見てみましょう。なるべく言葉で細かいところを。この人は何を思って作ったのか、じっくりと味わうようにして過ごして下さい。今日は、どうもありがとう。

作品から受ける印象の
原因となる造形要素

作品の題名

制作方法・技法について

- ・制作方法に根ざした形態の特質
- ・制作方法に関する作者と鑑賞者の考え

生活と作品との繋がり発見

鑑賞者独自の視点による作品批評

まとめ

今後の美術鑑賞について

記録写真 前頁掲載のギャラリートークの様子である。(T:ギャラリートーク担当大学院生/C:児童14名)



児童団体鑑賞では、このように児童を床に座らせてギャラリートークをおこなうことが多い。



考察

1. ギャラリートークの経過

ギャラリートークをおこなった大学院生、児童共に、それぞれ最初の班では少し緊張していた様子であったが、二回目のトークになると美術館にも慣れ、物怖じせずに話せる雰囲気となった。また、大学院生は、事前に学芸員からギャラリートークについての説明をうけ、美術館の下見をしていたほか、小学生に事前指導をおこなったこと、トーク作品について調べたことや、ギャラリートークの方法を検討したことなどにより、ある程度、自信を持って実践に臨めたものと思われる。児童は、大学院生の促しに応じて、多くの質問を行い、意見を述べ合っており、美術作品を介した活発なコミュニケーションがおこなわれた。



2. ギャラリートークの目的および意義

ともすれば美術鑑賞というと、作品の歴史的な背景に基づいた専門的知識がなければ楽しめないというイメージや、日常性から遊離した余暇活動、或いは手の届かない高尚な活動として捉えられがちなのではないかと思われる。そこで、ギャラリートークを行い、鑑賞者が作品から感じ取った印象や気づきなどについて話し合うことで、少しずつ美術作品と鑑賞者自身との距離を詰めていくことができるのではないかと思われる。今回のギャラリートークは、トークを担当する大学院生にとって今回が初めての体験であることや、参加児童の多くが今回、初めての美術館来館経験となるため、ギャラリートークを通して、美術作品を鑑賞するということが自体を学習することに主眼をおくこととした。

3. ギャラリートークの成果

今回のギャラリートークの実践により児童は、普段、教科書などでしか見たことのない美術作品の精緻さや迫力、技法や素材感など、肌で感じた意外な発見を言葉であらわすことによって、美術や美術館への新たな興味と親近感を持たたのではないかと思われる。今回、多くの児童が美術館の訪問は初めての体験であったこともあり、児童にとってギャラリートークの実践は、美術作品や美術館との関わり方を知る上での手がかりとなり、身近な文化や生活を美術作品からつたわる世界観との関連性で振り返ることもできただろう。

本来、美術作品の制作および発表、美術鑑賞や批評は誰にでもに拓かれているはずである。しかし実際は、それらが確実に保障されているとはいえず、多くの人が模範として学校で示される美術作品を正統な文化の象徴として憧憬と敬遠の眼差しでのみ捉え、美術作品の制作者あるいは鑑賞者ともなっていない現状があるかと思われる。美術館と地域住民、地域の学校が連携し、今後の文化の育成のために、美術を取り巻く状況を少しずつ改善し、より身近なものとして広く捉えられていく努力が必要だろう。そのため、ギャラリートークの実践など児童の素朴な感想を引き出す美術館の姿勢は、今日的な美術館の問題の解決だけでなく、今後の美術や文化に新たな可能性を育むものとして、学校教育の場にも求められていよう。文化の指導者と享受者という単純なトップダウン構造ではなく、ワークショップ形式での対等でインタラクティブな学びを導入していくことが、現在の学校教育の課題であると思われる。つまり、美術館でのギャラリートークをはじめ、様々な人との対等な交流を尊重するための積極的な取り組みが、学校教育にも反映されることが期待されていよう。

また、大学院生にとってギャラリートークの実践や観察は、小学6年生の児童から言葉を引き出す段取りや方法、内容、美術作品への知識など、教育活動に向けた具体的な課題を知ることになったと思われる。加えて、本ワークショップの実現へむけたプロセスの検討を通し、卒業後、教育現場において、ギャラリートークの実践を行う上で有意義な経験になったであろう。時代に応じて変化する社会に拓かれた教育施設のあり方に、国際化、情報化する今日に対応した人材育成に資する教育のあり方を見た学生もあったのではないだろうか。

4. 今後の課題

今後の課題として、美術作品や美術鑑賞についての学習を進めることはもとより、各発達段階や児童の個性に応じたギャラリートークの基準および規準を作成すること、ギャラリートークをより充実させるための準備や段取りを学生が主体的に行い、ワークショップの意義を理解し、ファシリテーション能力を向上させること、学校間で十分な連携体制をとること、体験学習での注意点を確認すること、美術館と連携し、美術館での教育普及活動について研究を進めることなどから、より有意義な実践を行うことが期待されていると思われる。

[上浦 千津子/兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所]

ギャラリートーク論（1）

鑑賞批評の基盤としての「作品記述」の問題

芸術体験や美術鑑賞経験とは、本来的には個人の内面における経験であろう。経験内容が外部に表明されることは少ない。個人の内面にとどまる経験は、直感的・感性的なものを含めて、言語化されないこともある。

言語化される場合、人はしばしば、大きな感動を表して「胸にずしんと響くものがあった」「ドキドキした」「ほっとした」「鳥肌がたった」、などという言葉をおこなう。それらは、個人がみずから得た感動を他人に伝達しようとするときにありがちな、一般的な日常会話における言葉遣いである。だが、これらの言葉は、実は鑑賞者の身体的症状を語る言葉でもあって、作品の内実を語る言葉ではないかもしれない、という点に注意しなければならない。

作品を語るときの形容の仕方には、きわめて微妙な問題がある。「面白い彫刻だ」「楽しい絵ですね」「心のなごむ作品です」、といった表現は、作品自体が面白いとか楽しいのではなく、鑑賞者自身が抱いた感情に言及している可能性を含む。なぜそう思うのか、それが具体的にどのような作品であるのかは伝わらない。

また、たとえ「暖かい色」や「動きのある描写」と述べた場合でも、実際の作品の物理的な温度は決して暖かくはないのだし、大方の美術作品は動くことなく静止している。つまり、これらの言葉は感情移入によって生じた比喩的な形容記述である。なぜ比喩的な言葉を使って語るのか、使いたい気分になるのか。何故、鑑賞者は上述したような身体症状や感動の情を覚えるのか、その本質的な要因を考え、それを言葉にすることのほうが、むしろ重要だといってもよいだろう。実際、とりわけ「美しい」「素晴らしい」「見事な」といった形容詞は、美術史家などの専門研究者、プロフェッショナルの批評家たちがもっとも警戒して、できるだけ使用頻度を少なくしている言葉である。すぐれた美術批評、解説・鑑賞批評文はおしなべて、なぜ美しいのか、なぜ素晴らしいのかを探り、作品をさまざまな視点から具体的に分析し論考するものとなっていることに注意しなければならない。

分析的な批評・論考をおこなうためには、先に挙げた身体的な語彙、感情または感想を語る直截な語彙とは異なるような言葉の準備が必要である。それは、直截な言葉を発する前の段階にあたる事柄を語る語彙であろう。すなわち、何が見えているのか、何が目に付くのか、どの部分がどんな風であるのか、事実として認められる作品の状態や事柄を、把握して言葉にすることが必要となる。見えている事柄を言葉にして把握すること、つまり「作品記述」が必要なのである。

もちろん、見えている事柄は、見るだけで十分わかっているのかもしれない。だが、それをわざわざ言葉にする作業によって、「認識」や「共感」が強化される点にも注意してほしい。たとえば、プロ・スポーツのTV放送における実況アナウンサーはなぜ、「打った、走りました」「シュートだ」などと叫ぶのだろうか。実況アナの存在は必要だろうか？——だが、実際に実況アナの存在を不要とみなす人は少ない。美術作品の鑑賞においても同じことだろう。見えている状態をまず言葉にすることが重要であり、美術作品解説や批評を執筆する専門家たちは、実況アナと解説者という二人組の仕事を、いわば孤独な内心の作業として、ひとりでおこなっているのである。

日常生活のなかで、目に見えるものをすべて言葉にする必要はない。しかも、加速化する現代生活、氾濫する画像情報のなかで、多くの人は無言かつ高速で「見て、わかる」ことができると信じている。お手軽に複製画像を入手し、次々と眺めては見捨てていく習慣は現代人の習性のひ

とつだろう。しかしながら、芸術作品のすべてが、そのようなハイスピードの現代生活の産物ではない、という点にも注意してほしい。複製画像の乏しかった時代、つまり古代や中世、さらには19世紀に至るまで、人々は自分が見た素晴らしいものや美術品について論じ、熱心に語り、言葉で伝えようとしてきたのだ。古い歴史の中で、じっくりと見つめられ、考えられ、語り継がれてきた美術品に対しては、語り論じるための、それなりの「ものの見方」が必要だといえよう。

「美術鑑賞をする」ということは、日常生活の視覚経験とは異なった、真に知的な視覚的经验を得ようとする行為でもある。そこでは、「少し立ち止まって長いあいだ見つめる」「努力して見る」「考えながら見る」「言葉にならないことを言葉にしてみる」という部分が不可欠となる。薄っぺらな感性信仰に基づく観賞教育ほど、無責任で危険なものはない、と注意しておいたほうがよい。

このように考えると、現代の学校における美術鑑賞の教育には、おおよそ3点の克服すべき課題があると思われる。そのいずれもが、指導者・教師にとっての目標課題であると同時に、美術鑑賞をめぐる教育の本質的な目的課題となるだろう：

- 1) 「時間をかけて考えながら見る」プロセスを体験・学習させること
- 2) 分析的な論考の土台となる「作品記述」、作品について見えている事柄・状態について言語化する能力を高める努力をすること
- 3) 美術作品を語るときの言葉、形容の仕方に注意深く、作品固有の特徴や価値について一般的な解釈評価や自分の考えが克明に伝わるような表現で語り、論じることができること

なお、歴史的情報や美術史学に関する詳細な情報を活用しうるのは、とくに美術に対する関心が高い児童、歴史知識をある程度そなえた中学生・高校生以上の場合だと考えていただきたい。学齢が上がるにつれて知識や経験が増え、語彙数も含めて言語能力が増大すると、美術作品について語る言葉も内容も、比例して一定の充実を示すこととなる。また、知識や経験は、他教科における学習や本人の人生の諸経験の蓄積によって形成されるところが大きい。逆にいうならば、生徒児童に対する「鑑賞教育・鑑賞指導」の本質的な問題は、知識情報量の多少にかかっているわけではないのである。むしろ、最も重要なことは、上述したような本質的な鑑賞プロセスを早期から体験しているか否か、芸術体験あるいは美術鑑賞批評のプロセスや構造を、心から味わいような教育を受けているか、提供しているか否か、であろう。

幼い子どもが、突然みずから芸術作品を理解し、鑑賞しうるものだろうか。おそらく、否である。しかしながら、少ない経験と知識、拙い言葉遣いでも、子どもはみずから作品の状態を把握し、自分なりの批評とその理由を分析できる可能性をもっている。美術・芸術体験あるいは鑑賞のプロセスを、より確かな形で導くことこそが、指導者・教育者の果たすべき役割だろう。

なお、美術作品を語るときの言葉に対する注意深さ、についてはわかりにくいところもある。これを理解するためには、大学における美術史学講義の受講や作品研究レポートの提出、大人向けの作品解説文の執筆などを試みるとよい。専門的な言葉遣いに気をつけましょう、ということだけではない。「作品記述」とこれを踏まえた的確な論評・解説をまとめあげる経験をした人は、ギャラリートークにおけるさりげない言葉遣いについても注意深く、また、対話の流れや展開の可能性、まとまりのつけ方について構想をたてることのできるのである。

「美術史の知識が不足しているので鑑賞の教育や指導はできない」というような、使い古された言い訳の言葉をこれ以上口にしないための努力を、私たちは始めたほうがよいだろう。

[喜多村明里／本学芸術系教育講座]

ギャラリートーク論(2)

作品を眼の前にして、私たちは何をおこなっているのだろうか。多くの人は「鑑賞している」と答えるだろう。あまりに当然のことを問うているようだが、では、「鑑賞」とはいったい何か、明言できる人はいるのだろうか。このように、何気なくおこなっている鑑賞行為を、その一環としてのギャラリートークを取り挙げ、鑑賞を取り巻く問題とともに考えてみたいと思う。

普段、美術作品を研究する者にとって、子どもと語り合うことは不慣れなことだ。作品について語る時でさえ、子どもの反応に戸惑ってしまう。このように戸惑いがちな研究者に比べるならば、学校教諭はどのような子どもの反応でさえ、しっかりと受け止めることができるだろう。だが他方、学校教諭は美術館で作品について子どもと語りあうことに、多少の不安を抱えているようだ。学校教諭が抱く不安は、子どもと語り合うことにあるのではなく、子どもと一緒に作品とどのように対峙すればよいのか、何を言えばよいのか、という点にあるだろう。

今回、美術館でおこなわれたギャラリートークはある特徴をもっていた。第一の特徴は、ギャラリートークの話し手が本学院生でありその多くが学校教諭またはその志望者であること、もう一つは、ギャラリートークの対象である子どもと対話しながら作品について語り合おうとしていたことである。一般のギャラリートークでしばしばみられる問題点は、限られた時間で、しかも美術館という特殊な場所でおこなわれるために、なかば一方的に話し手だけが語る解説風のギャラリートークになってしまいがちなことだろう。またトークの話し手は、学芸員やボランティアなど美術館に関係する人々であることが多い。こうした点に比べると、本プロジェクトでは、学校教諭の資質やその職能の特色を活かそうとした点で、従来のギャラリートークに新鮮な風を送ることが出来たのではないかと思う。学校などの館外で鑑賞の機会を増やしてくれる学校教諭の存在は、美術館にとっても心強い味方となる。また、子どもには一方的な説明を聞くよりも、教師との対話による鑑賞の方が親しみやすいに違いない。今後このような利点を活かした鑑賞の場が、いたるところでみかけられるようになることを望みたい。

むしろ、鑑賞指導としてのギャラリートークのより良い方法についてはさらに考慮しなければならないし、やはり課題は山積する。まず始めの課題は「話し手」の養成であり、「話し手」としての学校教諭が抱える課題を考えることだろう。この点に絞って考えてみよう。

子どもとのギャラリートークにおいて、子どもの専門家でもある学校教諭は、発言の促し方、問いかけ方や最終的な話の終結など、他の追従を許さないコミュニケーション能力を示す。しかしながら、鑑賞の教育という観点からみると、子どもに対し無批判な姿勢がいささか気になるところだった。特に今回多くみられた状況特徴としては、子どもの発言が「暗い感じ」「楽しい感じ」など、情緒的ではあるが曖昧な語彙による感想に終始していたことが挙げられる。もちろん、このような発言を「話し手」の学校教諭は受け入れていたのだが、これらの答えに対して、教師は「なぜ暗いと感じたのか」「なぜ楽しいと思うのか」と、その理由を聞いてみたほうが良いだろう。問い返された子ども達は、自分の発言に再び向かいあうことができるからだ。なお、このような、ギャラリートークでの鑑賞者を受けて、指導者としての話し手が、その発言について問い返すという対話は、美術史家や批評家が内心ごく当たり前のおこなっている自問自答と実はよく似ている。この点を意識して、一歩すすんだギャラリートーク、鑑賞指導を目指してはどうだろう。美術を巡るアプローチの方法はさまざまに存在するが、その中でも、美術史家や批評家は多くの鑑賞経験を持つうえに、言葉を使って作品の魅力を語り、多くの人々に伝える役割を担う。彼らにとって、鑑賞とはいわば、作品を通じておこなわれる知的な行為であり喜びである。その喜びを多くの人が分かち合えるようにすることが、鑑賞の指導や教育という活動の最大の目的ではないだろうか。

同じようなことは、今回のギャラリートークの特徴にも共通するだろう。一方的な解説ではなく、子どもと対話をはかることを目的とした点に注目しよう。子どもの発言は、その場の人々に、鑑賞による喜びを伝えようとする行為そのものである。だが、実際のギャラリートークの場を想像して欲しい。眼の前には、キャプションによるわずかな情報を除くと、ただ作品があるだけである。作品についての先

行的な知識や経験がほとんど無い状態で、子どもが自分の力と言葉を使って、鑑賞によって得た喜びを他人に伝えようとするのは困難であるかもしれない。このような目的に向かうにはある程度の経験や訓練を要する。

そのための一歩として、美術史家や批評家が鑑賞する際におこなう「作品記述」を参考にしてみよう。「作品記述」とは、作品の形体や状態など、目の前の作品から得る情報を言葉でなかば客観的に描写・説明する作業である。例えば、「何がみえているのか」「何が使われているのか」などの疑問に対し「気付いたこと」を答える作業といってもよい。気付いたことを言葉に置き換えることにより、「作品記述」は、時間をかけて作品をよくみることに繋がっていく。作品をよくみることで、新たな発見をする。そして、言葉に置き換えられた新たな発見はさらに「何故だろう」という問いを導き、このような自問自答の展開が何度も繰り返されていく。美術史家や批評家は、心の中で「作品記述」を敏速に、当たり前のように繰り返したうえで、批評や解説、意見を述べるのだ。作品を前にして、「作品記述」にもとづく自問自答や対話を繰り返した鑑賞者の発言は単なる感想ではなく、より深い感想となることだろう。

おそらく、子どもが一人で「作品記述」や自問自答をすることは困難であろう。だが、ギャラリートークでは、話し手が子どもに問いかけることでその手助けをすることができる。また、団体鑑賞では感想を他人に伝えて話し合うことの重要性や意義を重視したほうが良いだろう。ただ単に各自が感想を口に出すだけでは不十分なのである。「感想」とは心に浮かんだ思いであり、人によっては抽象的な言葉に終始して、他人には主旨が伝わらない場合もある。鑑賞によって得られた喜びや思いを他人に伝えることを目的のひとつに加えると、「作品記述」にもとづく対話のなかでより豊かに言葉を導き出していくギャラリートークは、子どもを含む初歩的な鑑賞者にとって、真に有益な鑑賞経験を与えてくれる場となるだろう。

以上のように考えると、確かに、今回のようなギャラリートークは初歩的な鑑賞者にとって有効な方法となるだろう。だが、その細部に関しては、さらに疑問の残るところもある。最後に、ギャラリートークに限らず、鑑賞全体を取り巻く疑問に眼を向けて終わりにしたい。

本論では、鑑賞者の発見に対して「話し手」が問い返す、というギャラリートーク独特の対話法を、専門家がおこなう「作品記述」のあり方になぞらえてきた。この方法は、作品から多くの発見を取り出しやすい点で大変有効だが、問題もある。たとえば、とくに現代美術では、感覚的な言葉すら導き出すことが困難と思われる時がある。しかもそのような場合、とりわけ鑑賞教育の場では、作者自身の発言が紹介され、「作者の思い」が強調されることになる。しかしながら、作者を作品の十全な理解者として、その意見に疑いも無く耳を傾けてもよいのだろうか。作者の発言に対する信頼は、何によって得られているのだろうか、という問題に答えることは簡単ではないのだ。

実際、作者の考えを一方的な「答え」として提示してしまうことを批判して、ギャラリートークを含む鑑賞教育からそれらを排除する傾向が一時期広まったこともある。だが、それでは鑑賞者の一方的な感想を述べるだけに終わってしまうだろう。「作者の言葉・考え」はあくまでも手がかりであって、そこに批評や解釈を加えながら作品を見つめ直すのだということを、私たちは見失ってはならないのである。

鑑賞の教育とは、批評や解釈の仕方の教育でもあろう。ギャラリートークは正しい答えを導き出すようなものではないし、対話がとめどなく堂々巡りする、といった問題も付きまとうのだ。殊に現代美術においては、美術の存在基盤さえ揺るがしかねない考え方もある。したがって、今日の美術史家や批評家は常に「美術」という枠組みに眼を配りながら作品と対峙しているし、彼らがどのような立場や視点から鑑賞しているのかは、決して一定ではない。美術史や批評でさえ流動的であるのだ。

以上のように考えると、本論で展開したギャラリートークも、専門家を参照にした方法の一つにすぎないと思える。このような意見は、これから鑑賞教育をおこなう学校教諭にとって、返って不安を誘発させるかもしれない。だが、確固とした基準すら定めにくい鑑賞行為だからこそ、さまざまな方法があってよいのだと思う。決して、鑑賞行為は専門家だけのものではないのだから、学校教諭がおこなうギャラリートークの展開も、新たな鑑賞行為への展望が開けるものとして大いに期待すべきだと感じる。

[酒井安純 国立国際美術館キュレトリアル・インターン]

なれが、おけのおかたにい給とが、高と、新めは、高てから、じだつたアビ
 よく見てみたら、キレた、た、立体と球、いしが、ちかくと、改、た、リしたから
 染、が、つた、好まな、作品は、他にも、た、一、く、人、あ、つた、ウ、と、
 その、中、で、あ、け、あ、か、は、い、げ、ど、が、あ、い、か、た、こ、ろ、が、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、
 が、大、好、ま、な、に、な、り、ま、し、た、。あ、ま、ち、が、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、
 美、じ、ゆ、か、ら、い、で、と、も、良、か、た、で、す、マ、ナ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、ら、と、守、れ、
 ぶ、か、た、で、す、

今日は、自分の毒印象に残った作品をみつけられ
 ることができたし、それ人が書いた理由も教えられた。
 金全部作品をみることに決めてよかったです。

私は、絵が大好きです。美術展に行くと、この作品は、正、美、術、展、に、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、ら、と、
 た、り、あ、つ、た、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 職、業、に、あ、つ、た、の、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 こ、の、手、球、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 た、り、あ、つ、た、に、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 初、め、に、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 今、日、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、知、る、人、は、あ、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、

Ⅱ) 作品を探そう!!!

①  ②  ③ 

著作権? ① 原画会社 ② 自由美術 ③ 社会平

Ⅲ) 鑑賞会をふりかえて

① 好きな作品は見つかりましたか?

いいね! どちらでもない どちらでもない 見つかりませんでした

② 美術鑑賞は楽しかったですか?

とても楽しかった どちらでもない どちらでもない 楽しかったです

③ また、美術館に行きたいと思いますか?

ぜひ行きたい どちらでもない どちらでもない 行かない

★自由に感想を書いてください。

金色の印みたいな形のが、ま、ま、ら、う、く、さ、さ、さ、ら、と、
 広くて、道、に、迷、り、た、り、し、た、の、つ、つ、か、れ、た、。

ワークシートのポイント：形式と製作過程について

1. ワークシートの作成にあたって

ワークシートは必要なのか、という素朴な疑問がある。

近年、多くの美術館でワークショップやギャラリートークなどの取り組みと並び、ワークシートの作成がおこなわれている。また、学校教育においても鑑賞教育への関心の高まりとともに、ワークシートを用いた鑑賞授業が盛んにおこなわれるようになってきた。

しかし、鑑賞を支える目的で用いられるワークシートが、かえって自由な鑑賞を妨げる場合があるのではないだろうか。次のような問題点を挙げることができる。

- ① ワークシートへの記述が自己目的化し、鑑賞そのものをかえって妨げている場合。
- ② ワークシートの設問が鑑賞者の内的必然性にそぐわない場合。
- ③ ワークシートに隠されたメッセージが鑑賞者を一定の見方に方向付けてしまう場合。

①では、スケッチや感想文をかくことに終始してしまい、結果として作品をじっくりと味わってはいないという場合、またゲーム形式の問いに答えることで鑑賞行為が完結してしまう場合などである。

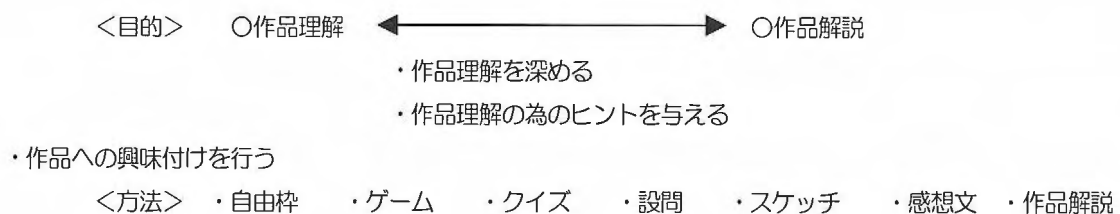
②では、問いの内容が鑑賞者の鑑賞レベルや興味関心に即応していない、問いの順序が鑑賞を深める過程に対応していないといった場合である。

③では、例えば作品のテーマをワークシート作成者の期待する方向へと誘導する問いかけがなされているといったことである。

これらに留意し、ワークシートの作成をおこなうこととした。

2. ワークシート原案の作成

ワークシートは「設問形式やゲーム感覚で問い掛け、鑑賞者の作品理解を深めるための書き込み式のシート」（岡本康明）とされるが、美術館や学校で用いられているワークシートは概ね次のように分類されるだろう。



小学生を対象としたワークシートの場合、作品への興味付けやヒントを与える目的で、記述するだけではなく、探す、クイズに答えるといった体験を含むことを条件の一つとした。

また、次のようなポイントからワークシートの内容を考えた。

- ① 年齢に合わせた難易度、文言の選択。
- ② 文字やイラストの工夫。
- ③ 作品を見る視点をわかりやすく提示すること。
- ④ 文章表現の苦手な子どもへの配慮。
- ⑤ 問いの数は出来るだけ少なくすること。

3. ワークシート原案の検討

ワークシートの文字原稿・設問の原案は次の通りである。

美術館探検（タイトル）

I) 作品を探そう。

II) 印象に残った作品を一つ選んで描こう。

「でも『印象』に残るってどういうこと？ もしかして面白い作品のこと？」

「『きれいやな〜』とか『スゲー』っていう作品かと思った。『あれ？』って思うようなのとか・・・」

「とにかく、心に残るような作品じゃないのかな。」

● どうしてこの作品を選んだのかな？

III) 鑑賞会をふりかえって（事後アンケート）。

① 好きな作品は見つかりましたか？

② 美術鑑賞は楽しかったですか？

③ また美術館に行きたいと思えますか？

★ 自由に感想を書いてください。

12月8日の「鑑賞教育論」の授業で、原案の検討を行った。

資料として神戸市立花谷小学校のワークシート例を配り、比較検討できるようにした。

神戸市立花谷小学校のワークシートは次の設問から構成されている。

タイトル お気に入りを探せ！

◇じっくり見て、自分の目でお気に入りの一点を選んでみよう。どの作品が気に入りましたか？

絵や言葉で書きとめておこう。どんなところが気に入りましたか？ 見ているとどんな気持ちになりますか？

◇常設展や西館1階を見て、お気に入りの作品を選んで絵や言葉で書きとめておこう。

◇展覧会を見て感じたことや、感想を書きましょう。

原案では、Iの問いで3点の図版掲載作品を探しながら美術館を見てまわり、その中で印象に残る作品1つを選んでIIの問いにうつるといった構成が子どもの意識に沿っていると考えたのだが、問いの重要性から印象に残る作品についての記述を先にすべきであるとの意見、また、「作品を探そう」では、子どもが落ち着いて鑑賞できないのではないかという意見も出された。結果、問いの順序を入れ替え、「作品を探そう」は時間に応じて取り組ませるといったこととなった（37-38頁のワークシート記入例を参照）。

4. 今後の課題

最初に危惧したとおり、作品のスケッチと感想の記述を必須のノルマとして取り組む傾向が強く表れたため、作品をじっくりと味わうという点では、ワークシートが妨げになっていたともいえる。美術館の床やシートに寝そべてワークシートをかくなど、マナーの面でも問題が見られた。一方、「作品を探そう」で、館内を走る子どもが注意を受けるといったことにもなった。

記述内容の分析は別の項に譲るとして、ワークシートの内容・形式面では、反省点の多い結果となった。記述の強要による形式的な鑑賞、ゲームによる放任的な鑑賞といったワークシートのマイナス面が伺えることとなった。次回はほぼ白紙に近いシートに気づいたことを自由にかかせるといった方法、また逆にある程度細かな問いをたて、問いに答えさせながら鑑賞を促すといった方法を検討したい。

いずれにせよ、ワークシートを活かすためには、美術館での鑑賞経験を増やすとともに、スタッフが子どもとともに鑑賞を楽しむといった積極的な姿勢を示していくことが重要と考える。

〔初田隆／実技教育研究指導センター〕

ワークシート付随の事後アンケート調査：目的および結果と分析

本ワークショップでは、大学教員によって参加児童への事後アンケートが作成された。事後アンケートの実施目的および実施結果、分析等は以下のとおりである。

事後アンケート調査の目的

1. 目的の概要

事後アンケートの実施目的は、本ワークショップに参加した児童が有意義な学習をおこなえたかどうかを確認することである。美術鑑賞が楽しめたかどうかを確認するには、多くの方法が考えられるが、今回は、本ワークショップの実践によって、より多くの児童が美術館に興味をもつことが期待されたことから、美術作品や美術館に親しみや魅力が感じられたかどうかを簡単な選択形式のアンケートで確認することとした。

なお、事前アンケートでは、美術館や美術鑑賞、今回の美術館見学への参加目的についての意識調査をおこない、その結果、児童の美術館訪問経験の有無に相関して美術鑑賞への好感度が異なることを確認した。そこで、美術館見学後に実施する「事後アンケート」では、今回の実践が初めての美術館訪問となる児童の美術館に対する好感度が高まったかどうかに着目し、これを既経験の児童の意識と比較する。今回の実践が有意義であったかどうかを、フィールドワークだけでなく、アンケート調査においても量的に確認することとした。

2. 各設問の設定目的

＜選択肢式アンケート：問1＞ アンケートの問1での質問「好きな作品は見つかりましたか」は、たくさんある美術作品の中から、自分の好きな作品を探し出すことであり、自分の感覚を客観的に捉え直すことができたかどうかを問う質問である。誰にでもに備わった、美的感覚を陶冶する意味も兼ね、美術作品をクリティカルに捉え、考える行為を促す問いである。実際に児童それぞれが好きな作品を見つけることが出来たかどうかよりも、主体的に美術作品を鑑賞することを促すことを目的に設定された。

＜選択肢式アンケート：問2＞ 問2の質問「美術鑑賞は楽しかったですか」は、今回のワークショップの実践が児童にとって楽しめたかどうか、換言すると「児童自身が有意義であったと感じたかどうか」をたずねる質問である。楽しくない美術鑑賞は、児童の心に「美術鑑賞は苦痛である」という固定観念を抱かせる危険をはらみ、その後の美術鑑賞をすすめる上でも大きな障害となることが懸念される。美術館での美術鑑賞の経験が浅い児童を中心とした今回のワークショップでは、何よりも「美術館」や「美術鑑賞」に親近感を持ってもらう事が大きな課題である。そのため、各自が美術鑑賞を「楽しむ」ものであることを意識してもらい、今回の実践が教育上好ましかったかどうかを確認するために、この問いは設定された。

＜選択肢式アンケート：問3＞ 問3の質問「また、美術館に行きたいと思いますか」は、美術館における教育普及活動の目的である、美術館への再来館者を増やす活動に、今回のワークショップの実践はいかほど寄与できたかを問うた質問である。また、この質問はギャラリートークの実施やワークシートへの記述、大学生や大学院生との交流のあり方など、今回のワークショップの実践が、総じて美術館の活動目的に応じたものであったかどうかを振り返るための一つの指標として設定された。

＜記述式アンケート：「★自由に感想を書いてください」＞

児童の自由な感想の記述を促すことは、「はい」、「いいえ」での解答形式のように、回答する児童の意識を限定的に導くのではなく、伸びやかな感情で美術鑑賞に親しみ、多くの視点で美術鑑賞を捉える可能性を保障し、今後の美術鑑賞の活動に必要な教育支援の活動に向けて、具体的な課題を得るために設定された。

事後アンケート調査の内容および結果

1. 事後アンケート書式

事後アンケートはワークシートに付随して、選択肢回答の3問と感想の自由記述からなる4問で実施された。

Ⅲ) 鑑賞会を繰り返して

①好きな作品は見つかりましたか？

しっかりと見つけた
 いくつかは見つけた
 どちらともいえない
 あまり見つけられなかった
 見つけられなかった

②美術鑑賞は楽しかったですか？

とても楽しかった
 どちらかといえば楽しかった
 どちらともいえない
 あまり楽しくなかった
 楽しくなかった

③また、美術館に行きたいと思いますか？

ぜひ行きたい
 機会があれば行きたい
 どちらともいえない
 あまり行きたくない
 行きたくない

★自由に感想を書いてください。

2. 事後アンケートの結果

事後アンケートの結果は次のとおりである。

回答者：兵庫教育大学附属小学校6年生66名

問 \ 解答※	意識の度合い（評価）					
	低 ← ← ←	1	2	3	4	→ → → 高
問①		0	0	3	35	28
問②		0	0	1	22	43
問③		0	0	3	28	35

※ アンケート選択肢の左から順に、5から1の5段階に分けた。

事後アンケート調査の分析

1. 事後アンケート回答が示すもの

事後アンケートの感想では、多くの児童が、「機会があれば美術館へ行きたい」、「好きな作品をみつけた」、「楽しかった」と積極的に記述しており、今回の美術鑑賞ワークショップは、ほとんどの児童にとって好感を持てるものであったと考えられる。これは、今回のワークショップの実践に関わった美術館スタッフや小学校教諭、大学教員、大学院生、大学生の働きかけや努力、日ごろより培われた児童の美術への学習意識などに、支えられた結果であると思われるが、総じて「美術館」という空間に親しみが感じられたことも大きな要因だったということもできるだろう。当初は大きな空間に圧倒された感もあったが、展示空間や美術作品から開放的な雰囲気を受け取り、多くの親切なボランティアスタッフおよび学芸員、学校教員、学生に見守られて、充実した鑑賞会となったのではないかとと思われる。選択式のアンケートからは、圧倒的に好感度の高さが示されており、少なくとも、今回の美術館訪問が嫌な思い出となった児童は、いなかったのではないかとと思われる。

また、今回、ワークショップの実践における一つの成果は、今後、美術館への再来館者の増加が見込める点である。アンケート結果から、多くの児童が好感を示しているのは明らかであり、しかも、今回初めて美術館

を訪問した児童は、問③について既経験の児童とほぼ同様に「ぜひ行きたい」「機会があれば行きたい」と回答するようになっている（ χ^2 検定 $p < .70$ ）。

なお、記述による感想で最も多かった意見は、「いろいろなもの（美術作品）がある」、「たくさん（美術作品が）ある」という意見であった。半数近くの児童が、美術館の訪問が初めての体験であったため、このような素朴な感想が多数述べられたのではないと思われる。次に多かったのは、「楽しかった」、「面白かった」、「良かった」、「素敵な作品」といった美術館への高い好感を示す感想である。他に、「不思議とか面白いって感じたものが多かった」、「枠から出てきそう」などの気付きや、「マナーが守れて良かった」といった振り返り、「作品の特徴を考え、理解した」といった美術鑑賞への理解の深まりや、「（美術作品の）表情が豊かだった」等の美術作品への興味を示す感想がみられた。

今回、ワークシートで簡単な作品スケッチをおこない、感想を記述することによって、児童はじっくりと美術作品を観察するということ自体を学んだようである。ただし、ワークシートの記入作業によって、児童が自由に美術作品を観察し、美術館内を見て廻る時間が制限されたことも確かであろう。もし、それが美術館を再び訪れてみたいという興味に転化されたなら、喜ばしいことと思われる。なお、大学院生だけでなく、美術館のボランティアスタッフに美術作品に関する児童の疑問に答えてもらえたことが、今回、児童がワークシート付随の事後アンケートを記入していく上で大きな助けになった。児童は、小学校教諭が見守る中、普段接する学校関係者とは違った外部の人々ボランティアスタッフや学芸員、大学院生や大学生と交流した。美術館での鑑賞会は、生きた体験として児童の心に暖かい気持ちを与えたのではないだろうか。

総じて、今回の美術館見学により児童は、美術作品を鑑賞する態度や、美術館が身近で親しみの持てる社会教育施設であること、社会での美術館の役割などについて理解を深めた。同時に、今日的な学校教育および美術館、美術鑑賞の課題解決に向け、次のような一定の成果と今後の課題が得られたのではないかとと思われる。

2. 兵庫教育大学鑑賞教育実践演習ワークショップの成果

- ① 美術館において主体的に美術鑑賞を楽しみ親しむ態度が培われたこと。
- ② 社会教育施設の一つとして美術館の役割や内容が理解できたこと。
- ③ 美術作品を核としたコミュニケーションをする経験ができたこと。
- ④ 地域の人々との交流の中で、美術作品に親しむことができたこと。
- ⑤ 今後、美術館での鑑賞教育活動に向けて、学校教育における実践的な研究課題が明らかになったこと。

3. 今後の課題

1) 生涯学習社会を展望した美術教育を実践すること

今後、本学の附属学校園における教育の場では、今回のワークショップでの学びを生かし、美術鑑賞に対するさらなる興味へと繋げていく努力が求められると思われる。さらに、我が国における児童の発達段階あるいは個人個人の文化的背景や個性に応じた具体的な美術鑑賞プログラムの開発と実践、検討が期待されよう。

2) 大学と地域との連携をすすめること

今後、幼稚園・小・中学校・高等学校、美術館やカルチャーセンターなどの社会教育諸施設、そのほか地域住民と大学との連携や、その方法、内容についての具体的な実践と検討が求められると思われる。

3) より実践的な鑑賞教育のあり方を目指すこと

有意義に機能する鑑賞教育の方法・内容のさらなる実践に向け、学校および社会での美術鑑賞をとりまく課題の析出と、解決策の明示が望まれよう。

[上浦 千津子/兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科]

参加者(院生・自主参加学生・教員・教諭)アンケート結果

「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」
12月25日(水) 於・兵庫県立美術館
ギャラリートークの運営・実践に関する反省と意見

1: 記入者は: 「鑑賞教育論」履修院生(氏名=)
 ギャラリートークの実践担当者
 自主参加の院生
 自主参加の学部生
 12月1日のレクチャー+下見に参加した
 現職教員(小・中・高)である
(↑該当項目にすべて√印を記入してください)

2: 本日のギャラリートークを実践または観察して、全体をあなたが10点満点で評価するとすれば何点を与えますか。 _____ 点/10点

3: あなたが減点した部分の理由は何ですか(複数選択)。
 ギャラリートーク実践の準備が足りなかったと思う
 児童の行動に対する指示・誘導が不十分だ
 タイムスケジュールが過密だ
 楽しくない・面白くない・退屈だ・レベルが低い
 危機管理(迷子・傷病・事故など)に不安がある
 その他

4: 今後、ギャラリートークをあなたが実践するとすればどのような部分に気をつけますか。とくに配慮が必要だと思う部分を挙げてください。

5: 本ワークショップの全体プログラムは、本学の16年度特別教育支援費によって緊急実施されたものです。このような授業形態は毎年あった方が良いでしょうか?
 毎年あると良い / 「」年に1回でよい
(↑数字を記入)

資料「ギャラリートークの運営・実践に関する反省と意見」アンケート

本プロジェクト終了後に、運営と実践に関する反省と意見を求めてアンケートを実施した。

ここに転写した参考資料は、配布したアンケート用紙である。

書式：A4版×1ページ

アンケート回答者は、本学の開講授業科目「鑑賞教育論」を履修している院生9名のほか、本校教員4名、自主参加院生2名、自主参加学部生9名の計24名である。

その内、実際にギャラリートークをおこなった者は、鑑賞教育論を履修している院生6名であった。

アンケート回答結果は次頁以下の別表に掲載した。アンケートの第二の質問における10点満点評価に関しては、実際にギャラリートークを担当した院生のほうが、それ以外の者よりもやや低い評価点を与えた。多く問題とされたのは、鑑賞マナー指導とギャラリートークの内容だろう。回答全体を見渡すと、減点理由には「児童指導」への配慮に対する未熟さを指摘する傾向がやや強くみられる。なお、実際にギャラリートークを担当した院生には、ギャラリートーク実施への具体的な反省がより強く伺われる。やはりギャラリートークを実践しなければ、実質的な問題がみえにくいのではないだろうか。

いずれにせよ、第4の質問における自由記述では、いかに子どもの関心を引き、より高い鑑賞行為へ導くことができるかという「児童指導」や鑑賞マナーを教えるための「児童指導」のほか、準備や時間配分に関する「スケジュールの組み立て」などの方法論に対し、参加者から活発な意見が出された。これらの意見は、今後の活動に活かすことができる点で重要な意義をもつ。

今後、こうした経験やアンケート結果を基にして、さらに踏み込んだ具体的なディスカッションを進めると良いだろう。

今回のような実践演習の実施頻度については、「毎年の実施」を希望した者が多かった。参加者の多くは本プロジェクトのようなギャラリートークの運営・実践研究に対して好感をもったのではないだろうか。

別表一参加者(院生・自主参加学生・教員・教諭)アンケート結果

記入者情報	点数	減点理由						演習の希望頻度	自由記述 ギャラリートーク自薦をめぐる今後の注意点と配慮を要する事柄 ※印=左記「減点理由」における「⑥その他」の記述内容
		①ギャラリートークの準備 ②児童指導 ③スケジュール ④内容 ⑤危機管理 ⑥その他							
		①	②	③	④	⑤	⑥		
履修院生かつ トーク担当 事前参加 現職教諭(高)	6						×	毎年	(※小学生親の問題) 喋りすぎない,準備,1グループの人数過多,恒常的なアドバイス(トーク者への)が必要,工夫 自分も「非人称人間」になりたい,袋をかぶりたい,自分も「寄生虫」を作りたい等、体験したがる子が結構いたのは良い
履修院生かつ トーク担当 事前参加 現職教諭(中)	6		×					毎年	児童のマナーの徹底に必要感。 (→継続することにより育てる)、児童を事前に理解する (→経験必要)
履修院生かつ トーク担当 事前参加 現職教諭(中)	2		×					毎年	(※不明記)充分すぎる人数配当(館スタッフ含)の中で、誰がどこまでを担当するのか、どこまで館側に任せ、どの部分は教師・学校がやるべきなのかという点を把握しておく事が大切と感じた。「学校」-「館」の場合はないが、[大学院なので]今回はとまどいがあった。
履修院生かつ トーク担当 事前参加 現職教師(中)	7			×			×	毎年	(※説明理解度の問題) ギャラリートークの事前に教師がかなり作品について深く理解(勉強)しておく,不十分では子供に理解されない。
履修院生かつ トーク担当 事前参加	7	×			×		×	毎年	(※ワークシートの問題) 選ぶ作品が大切,指導者(自身)の学習機会(授業)充足,事前指導,子供との対話,グループ毎の担当者形式 ワークシートの絵を探すために、他の絵には目もくれず走っていたが、最後には落ち着き安心した。
履修院生かつ トーク担当 事前参加	5		×				×	毎年	(※発話の促しの問題) 事後指導が記憶に残るものになってくる,初対面の児童に対して発話を促すことが難しいので,前半では打ち解けるような工夫が必要,自由鑑賞は,ワークシートを中心に発話が進められた,ギャラリートークと見る時間の兼ね合い,ギャラリートークの型への共通理解があってもよい
履修院生かつ 現職教諭	6		×				×	隔年	大学・付属小・館の連携が重要(それぞれの意識に差があった),打ち合わせをし,夫々の役割を確認する必要性
履修院生	9						×	隔年	(※指示を忘れて[壁やケースに]触れてしまう子がいた) ストレートの方のトークは上手。落ち着いて,引き出していた。時間配分,描写時間の短縮
履修院生	7							隔年	①絵を見せる②作品知識を一方向的に説明するのみ/鑑賞を強制しない。子供に感想をすぐに言語化させない。
大学教員かつ 事前参加	8	×					×	隔年	(※小学校との連携の問題) ギャラリートークのスキルアップを事前に十分にしておく
大学教員	7		×				×	毎年	(※スタッフの任務分担不明瞭という問題) 本日のスケジュールの逆は?自由鑑賞→質問→話し合い→解説,しかし時間必要かも

大学教員	9		×					毎年	・記録を充実させたい・それぞれのトークで個性的な解説が面白かった・工夫がある・沢山の[録音]マイクを使うべきだった・子供の声をひろう
大学教員	7	×	×					毎年	全学(学部生全員)でも取り組めるのではないか。ギャラリートークの時、トーク担当と別のトーク担当が実践、観察を分担しても良いかも
自主参加院生 かつ 現職教諭(中)	7	×						毎年	知識中心になりがち、子供にどの部分の鑑賞で満足させるかを勉強し準備する必要がある、子供の状態を見ながらの発話の勉強(スキル)を行った上で実践したい、今回は知識は不要、子供の感想を共感する内容で十分、初心者が多いので楽しく語り合うギャラリートークのみでよく、子供の質問に対応するだけでよい
自主参加学生 かつ 現職教諭(小)	8						× ※	毎年	(※時間配分、少しギャラリートークが長くなり、見る時間が少なくなった) ・事前指導、学校内での理解、協力、子供達が絵をじっくり見て、絵を見る喜びを感じることもや考えることができるためのギャラリートーク、事前指導の研究・兵教大生院生を一緒にいいので紹介できたよかった。(見学中に子供に話しかけても、何の人という感じの顔をされる場合があった。)
自主参加学生 かつ 事前参加	8						× ※	毎年	(※状況での限界があった) 子供の興味の把握、小学校教師の理解
自主参加学生 かつ 事前参加	7				×	※		毎年	(※時間が無かった) 大人がガラスケースに触ったりしていたのはまずい。声かけも大きすぎたと思われる場面があった。トーク自体は悪くなかったと思う。)どこまで知識の部分を子供に伝えればよいか難しいと思う。人数が多ければ多いほど、集団行動が難しくなると思うので、その誘導を考えておくべきである。
自主参加学生	7		×				× ※	毎年	(※興味を持って聞いている子とそうでない子がいた)
自主参加学生	5	×				×		毎年	ギャラリートークする人のスキル
自主参加学生	7	×		×				毎年	指導をする側の説明しすぎが少し気になりました。もう少し子供に見学させてあげる時間があれば良かった
自主参加学生	8		×	×				毎年	短時間で子供たちに興味を向けるのは大変だと思った。「今日ここで何をしたらいいかわからない」という子がいた(気になった)。
自主参加学生	8		×					毎年	作品に対する知識が重要。子供たちの多様な質問に対して説明できるように。
自主参加学生	7		×	×				毎年	こちらが喋りすぎず、子供たちの言葉を大事にする(子供たち一人一人の感じ方や、表現を大切にしたいので誘導尋問のような質問は避ける)。できるだけたくさん自由に作品を観させる(ギャラリートークよりも自由に見て回ることのほうが楽しそうだった)。鑑賞の順番などもっと研究を重ねていく必要がある。
自主参加学生 かつ トーク参加	8						× ※	毎年	(※説明する作品を増やし、一つ一つの説明は短く)たくさん作品を自由に見る、なるべく話は短くする
回答者数 計24人	平均 6.9	8	11	5	2	1	11		本プロジェクトのようなワークショップ形式での鑑賞指導・ギャラリートーク実践演習を毎年希望する=20人 隔年希望する=4人

附属小学校の声：図画工作科担当教諭と6年生引率教諭の意見

1 日時などの設定について

2学期になってからの企画であり、準備などのために実施日が12月となったことは、今後の検討課題であろう。たまたま当日は温暖で晴天であったからよかったものの、雨天や風雪があった場合は、鑑賞どころではなかったはずである。県立美術館は公共の施設であり、館内での飲食ができないことは理解できるが、雨天の場合の食事は、美術館のひさしの下でとか、バスの中でとか、小学生の見学に対しての配慮があったとはいいいがたい。県立美術館の周辺には、防災センターなど様々な施設がある、子どもたちのことを配慮するなら、交渉次第で利用できるのではないかと考える。

2 学習の展開について

本校の各教科・道徳・特別活動では、「子どもたちの姿」を学びの柱としている。そこに教師が関わっていくことで、学びの道筋を探り、子どもがどのような力をつけていくべきかを追求している。すなわち、子どもたちが学ぶべき対象を目の前にして、その子なりの「見方、考え方、あらわし方」が生まれ、子どもの学びの中で何がどのように変容しつつ、「その子の」学びとなっていくのを重要視しているのである。

このような観点に立つと、学習の展開においては、まず、子どもたちが美術館の作品に自由に触れ、それぞれが何らかの考えを持つに至った時点で、子どもの意見を教師といっしょに集約することから始めたい。話し合う中で、子どもたちの観点を発展させた「見方、考え方、あらわし方」の合意形成がおこなわれ、そこからあらたに課題意識を持って鑑賞することで、初めの鑑賞では得ることができなかった「見方、考え方、あらわし方」に変容していくものと考え。

私たちが考える鑑賞教育の在り方としては、これが理想である。しかし、この学習展開を実現するにはハードルがいくつもある。ひとつは、子どもたちの興味関心を出発点とした学習の流れは、美術館側にも大学側にもほとんど例がないことである。ギャラリートークを展開することを想定してみると、子どもたちの興味や関心に基づいて選出した作品と、指導者側が準備した作品が一致するとは限らない。したがって、ギャラリートークを成立させるためには、指導者が美術館内の全ての作品について深く知り、ギャラリートークを展開できるだけの話術を持っている必要がある上に、その場での臨機応変な対応が求められることになる。もうひとつは、多くの子どもたちが、美術館での鑑賞を体験していないことである。したがって、美術作品を前にして、その子なりに鑑賞を楽しむことはできても、何らかの「見方、考え方、あらわし方」を明確に持つことができないまま時間だけが過ぎるのではないかという懸念がある。ただ、「作品に触れた、楽しかった」だけでも体験としては成立するが、学習として成立しているとは言い難い。

3 鑑賞教育プロジェクトを振り返って

スケジュールの都合から、対象者が6年生となったが、対象を4年生や5年生として、以降の子どもたちの造形表現にどのような変容があるのかを検証する試みをするほうが望ましい姿であると考え。あるいは、低学年の子どもたちに、美術館でのマナーを中心に学ばせつつ、鑑賞体験をさせるというのも、それ以降の子どもたちの造形活動に様々な期待ができる。今後は、鑑賞教育についても発達段階を踏まえた系統性のあるプログラム作りが必要となるであろう。

一方、保護者からは今回の取り組みについては、多くの賛同を得た。今後の鑑賞教育を進めていく上では、保護者への参加や協力を求めるなどの試みも検討していくべきであろう。

[中田高俊／本学附属小学校教諭]

1月28日（金）兵庫県立美術館訪問 [第三回・最終回]
 神戸市立横尾小学校5年生2クラスの美術館見学の様態と
 美術館学芸員・エドゥケーターによるギャラリートークの観察

■タイムスケジュール

8:45 本学院生の集合＝本学事務局棟南側玄関

8:50 出発（中型バス1台）

10:10 到着＝兵庫県立美術館

団体入場手続き→入場券配布（→レクチャールームへ）

10:15 神戸市立横尾小学校児童65人＋教諭3人の到着（→レクチャールームへ）

トイレ休憩

10:25 見学プログラム開始

10:25- ①事前レクチャー（25分）

（担当：学芸員 相良周作氏）

美術館という施設について

見学のマナー・ルール

■観察時の注意とお願い

① 一般来館者として、さりげなく
 自然に観察してください。

② IDカードは使用しません。

*特別な印象を子どもに与えないこと

10:50- ②ギャラリートーク（20分×2回＋10分×1回／展示室3・5／担当：中田誠、相良周作）

10:50 ↓	1組 ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》1983 石膏・着色 [中田誠]	2組 片山みやび 《お天気だけの日》1992 リトグラフ・紙 [相良周作]
11:10 ↓	1組 片山みやび 《お天気だけの日》1992 リトグラフ・紙 [相良周作]	2組 ジョージ・シーガル 《ラッシュアワー》1983 石膏・着色 [中田誠]
11:30 ↓ 11:40	（合流・全体で） グループ《位》の活動と作品について [中田誠＝グループ《位》のアーティストのひとり]	

11:40- ③自由鑑賞＋ワークシート「お気に入りを探せ」（40分：常設展示計8室）

（トイレ休憩含む）

12:20- ④まとめ「お気に入りはコレだ」（15分：レクチャールーム＋書画カメラ使用）

記入ワークシート8点を書画カメラでスクリーン掲示、記入児童がコメントを発表、拍手。

12:35 終了（横尾小学校児童の見学に随行・観察するのはここまでで終わり）

12:35- 昼食（兵庫教育大学関係者は各自で食事・自由行動へ）

自由行動：「国際絵画コンペティション」展または

「神戸っ子アートフェスティバル」見学

14:30 再集合・出発（館内ミュージアム・ショップ）

15:45 帰着・終了

横尾小学校児童は弁当での昼食を済ませた後、「神戸っ子アートフェスティバル」（学校生徒児童の作品展示）を見学、帰校した。

横尾小学校作成の見学用しおり+ワークシート
 [横尾小学校 松田昌代教諭 作成・提供/協力 兵庫県立美術館
 B5版・モノクロ刷・全9ページ・5年生用



美術館へ行こう!

日 平成17年1月28日(日)
 ところ 兵庫県立美術館「芸術の館」
 内容 展覧会(じょうけつてん) アートフェスティバル(神戸市の小・中学生の作品展)
 持ち物 お弁当・水筒・ナップリソク・しき物・ワークシート
 ハイパー・エコロンカード・ 鉛筆(消しゴムは持っていかない。) 色鉛筆(画入りやのぼり紙に色鉛筆は入れ替える。)
 服装 藍色やしき物、運動靴、 防寒具(晴れていけは傘を持って行きましょう)

★美術館での約束

美術作品はみんなの宝物です。作品を大切に守るやさしい気持ちで鑑賞しましょう。また、美術館では他のお客さんをお邪魔します。忘れちゃあしく鑑賞できるように、次の注意事項を守りましょう。

1. 作品に触れぬようにしよう。(さへぎも触れぬように)
2. 静かにゆっくりと見よう。(話さない、走り回らない、大声を出さない)
3. 学校を忘ることは絶対にありません。
4. (消しゴムはダメです。)
5. ソファに座らない。
6. ちし、パンフレットは持ち帰ってきましょう。



p. 1 : 表紙

pp. 2-3 : 図面/日時・場所
持ち物と館内マナー

pp. 4-5 : 当日のタイムスケジュール
美術館と展示内容の紹介

★タイムスケジュール

9:00	学校出発 (トイレ行きまで)	
9:30	美術館前・受付広場	
10:00	廊下 トイレなど	
10:10	レクチャーホール(美術館内) ○展覧 美術館の展示 ○説明 (美術館とはどういうところか、美術館の役割) ○展示 (そのレクチャー、多岐種) ○解説 (展覧会について)	
	1 階	2 階
10:40	ギャラリートーク①(鑑)	ギャラリートーク②(鑑)
11:00	ギャラリートーク③(鑑)	ギャラリートーク④(鑑)
11:20	自由鑑賞 お気に入りの作品を見つけて、絵や写真で、かきとめる。(トイ)	
11:50	レクチャーホール ○まとめ (みんなのお話を紹介する。)	○休憩
12:10	ランチタイム	
13:10	アートフェスティバル鑑賞	
14:00	美術館出発	
15:00	学校着	

今、美術館では、こんなことをしています。

美術館では、展示だけでなく、様々な活動を行っています。例えば、子どもたちが美術館で学べる機会を増やすために、ワークショップや講座を開催しています。また、地域の子どもたちに美術館の魅力を伝えるために、学校へ出張鑑賞会を行っています。

自由鑑賞 自由鑑賞は、展示の魅力を最大限に引き出すための大切な時間です。ぜひ、ゆっくりと作品を観賞してください。

自由鑑賞の楽しみ方 自由鑑賞の楽しみ方は、作品を観賞することだけでなく、作品の背景や制作過程を知ること、他の観覧者の反応を観察することなど、様々な方法があります。ぜひ、自分なりの楽しみ方を見つけてください。

■掲載図版は、所蔵品図録からの転写のほか美術館提供の画像を使用。イメージスキャナの普及により、教育目的の画像利用はきわめて容易となった。良識ある質の高い「しおり」である。

みんなで見つけたこと、自分の感じたことを書いてみよう。

観覧 作品名

みんなで見つけたこと、自分の感じたことを書いてみよう。

観覧 作品名

お気に入りのを見つけよう!

氏名 _____
 所属 _____

★名札の見方

氏名 1994年 国中・高 学年 課 (1994-1994)	⇒	氏名 作品がつくられた年 制作・技法 作者の年齢 (生まれた年-現在年齢)
--------------------------------------	---	---

pp. 7-8 : ギャラリートーク記入用紙 (2回分)

自由鑑賞用・補助ワークシート [背表紙] p. 9

神戸市立横尾小学校5年生2クラスの美術館見学と美術館によるギャラリートーク



1：学芸員による小レクチャー
美術館の役割とはたらき
館内マナーの約束

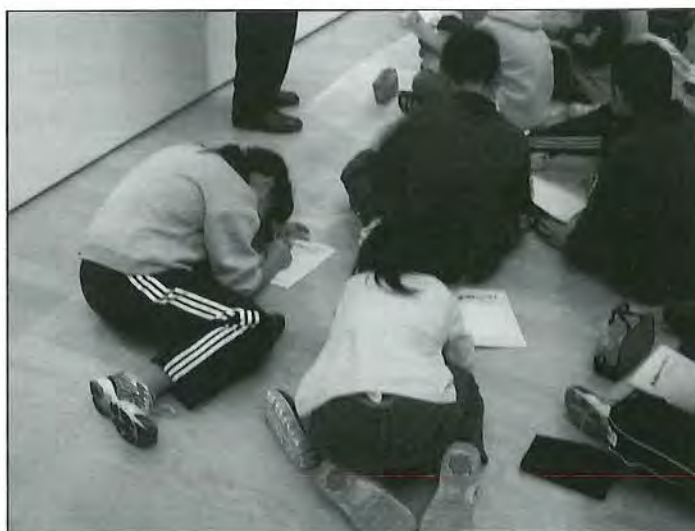
後方は本学院生と市民ボランティア



2：鑑賞指導としてのギャラリートーク [左：ミュージアム・エデュケーター/右：美術館学芸員]

3：「最初に作品を見て、気になった
ことを何でも書いてください。」
ギャラリートークにおける
(初見段階の自由記述)

初見の時点で鑑賞者が感じたことは
ギャラリートークの展開における出
発点となるため、初見段階の自由な
作品記述を促すことが重要である。
開始冒頭の4-5分間は、自由記入を
促す。



ミュージアム・エドゥケーターと学校教諭：鑑賞教育における学校教諭の課題

美術館見学を訪れた学校生徒・児童に対する「鑑賞教育」にはさまざまな形式・様態があるだろう。本プロジェクトでは、鑑賞教育の実践演習として内容を限定し、「美術館所蔵作品に関する鑑賞指導方法としてのギャラリートーク」を試行した。これは、現職教諭または将来の学校教諭・引率教諭にあたる本学院生が、付属小学校の生徒児童を対象として問いかけ、話し合いながら進める「鑑賞指導方法としてのギャラリートーク」の演習と研究を目的とする。その実践方法や指導の実情については本書27頁以下を参照されたい。ここでは、鑑賞指導者としての「ギャラリートークの担い手（司会・誘導者）」がどのような存在であり、どんな準備や資質が必要とされるかを考え、学校の図画工作科・美術科教育を担う学校教諭と、美術館の教育普及活動担当者との間の共通性や差異について述べておく。

美術館の教育普及担当者たちとギャラリートーク指導・誘導担当者に求められる準備

美術館における教育普及担当者には、現在、学芸員のほか、社会教育主事や教職経験者を「ミュージアム・エドゥケーター」などの教育普及担当職として配置する例が増えている。これは、生徒児童にわかりやすく親しみの持てる対応をするスキルに習熟した学校教諭経験者の能力が高く評価されているためである。学芸員は少数であるうえに、美術史学専攻で子どもに対する教育経験がなく、教育普及活動を苦手とする者も少なくない。また、東京国立近代美術館を代表的な例として、子供向けの作品解説を一般の「市民ボランティア」が担当する制度も日本で定着し始めた。美術館は、教育活動の経験がある人々の協力を広く求めているのである。これらの現象は、難解な専門用語や高度な言い回しを避けて、わかりやすく誰もが親しめる美術鑑賞を、市民と社会のものとして再構築していこうとする努力の表れでもあろう。

さて、これらの美術館教育普及活動の担当者たち——学芸員やミュージアム・エドゥケーター、市民ボランティア——が生徒児童に対して行なう鑑賞指導の目的は、美術に関する知識の提供や美的・芸術的価値の理解への到達そのものにあるのではない。よく考えると、それは大人や専門家にとっても難しいことなのである。したがって、実質的な目標はむしろ、見るプロセスやものの見方の多様性を実感させること、鑑賞プロセスの体験そのものを提供することに置かれることになる。実際、ギャラリートークの実施の要点は、①鑑賞者あるいは生徒児童の限られた知識や認識を出発点として対話を展開させること、②対話において児童生徒の理解を補強し、事実に関する誤解があれば修正を促すこと、③さらに新しい疑問や興味関心、思考を導き出すこと、であり、この3点が満たされれば、ほぼ目標に到達したといっていよい。

このように考えると、ギャラリートークの実践者が必要とする知識は、実際のところ「その作品に関する一般的な知識」程度にとどまるし、具体的に必要とされる準備は決して多量ではない。最小限の準備としては、図録があれば作品解説を一応通読しておくこと、そして出来るだけ作品の外観・特徴をよく把握しておくこと、それで十分である。美術史上の知識をすべて暗記する必要はないし、そんなことは不可能だろう。実質的には、「わからないことは一緒に考えてみようか」という言葉を返すだけの余裕を持つこと、トークの進行運営上の想定準備がある程度出来ていることが重要なのだ。鑑賞者からどのような反応がありうるのか、トークがどんな方向に展開しやすいか、質問があればどのように答え、質問がなければどのような視点でどんな問いかけをするのか、といった心構えができていのか否かが何よりも大切であり、自分自身が安心できる程度の心構えと準備がありさえすれば、ギャラリートークの指導実践は簡単だ、といってもよいだろう。多少の失敗も含めて数回の実践経験を重ねる必要はあるが、鑑賞指導としてのギャラリートークのコミュニケーションは誰にでも誘導できるし、やる気のある人ならば誰でも指導・担当することができるものといえよう。市民ボランティアによる生徒児童向け作品解説においても、一方通行の知識提供ではなく、対話形式の解説が望ましいとされており、その理想はほぼ、本プロジェクトの課題となったギャラリートークに近い。

学校教諭と鑑賞指導——学校現場における鑑賞指導の実践

ところで、学校教育において鑑賞指導がたち遅れがちといわれるのは何故だろうか。「専門的な知識に乏しいから」といった悩みは、この際忘れおくほうがよいのかもしれない。誰にでも楽しく出来るギャラリートークは、図画工作科・美術科教諭のみならず、美術館見学で児童を引率してきたあらゆる学校教諭にも可能なことなのである。また、近年の指導要領では鑑賞教育の必要性が強調されており、鑑賞教育は、文化的アイデンティティの醸成や異文化理解にも関わる重要な教育課題となっている。図画工作科・美術科教育が、実技制作指導のみに専心していただける時代ではない、ということ、私たちは改めて心に刻んだほうがよいだろう。

もちろん、学校現場の教師には、美術・図画工作の授業時間の縮減や職務内容の多様化と増大など、それなりの厳しい事情がある。また、美術館におけるギャラリートークには、美術館まで出かけて作品を実見するという特別な時空、しかも学芸員やミュージアム・エドゥケーターといった「特別な人」が対応・指導してくれるという特権的な価値が付加されている。したがって、まったく同じことを学校教諭に期待するのは無理であり、美術館にすべてを任せたいほうが良いのだ、という反論もあるだろう。美術館に行って作品を実見するという「特権的な・特別な」機会を学校教師が準備して、美術館のプログラムを利用すればそれで十分ではないか、というのである。

だがさらに反論を加えておこう。美術館において、学校教師が生徒児童の指導を委ねることになるミュージアム・エドゥケーター（＝教職経験者）のスキルには、学校教諭のそれと同質の部分が多く含まれる。作品をよく見知っていることは重要だが、その種の準備ならばある程度は学校教諭にも可能だ。ミュージアム・エドゥケーターと学校教諭の違いとは、つきつめてみると「ギャラリートークの実践経験の回数の違い」にすぎない。同じことは学校教諭に出来る、といえるだろう。美術館に子ども達を連れて行くだけでよいと考える学校教諭は、実はみずから「特権的・特別な」演出効果に騙され、それに溺れてしまっているのではないだろうか。

美術館の教育普及担当学芸員・エドゥケーターたちには、来館する生徒児童とはほぼ初対面であるというハンデがある。これに対し現役の学校教諭は、生徒児童との日常的なコミュニケーションを重ねている点で有利であり、上述したような簡単な準備と心構えさえあれば、美術館に子どもたちを連れて行ってすぐ、みずからミュージアム・エドゥケーターとなって活躍することもできることだろう。美術館の展示を実見する、という恵まれた条件設定を真に有効に活用しようとするならば、学芸員やミュージアム・エドゥケーターがおこなうトークと組み合わせ、学校教諭がみずから子どもたちとギャラリートークを試みることも可能である。また、そのほうが教師と児童生徒が一体化して「楽しい鑑賞」を体験しようのではないだろうか。

筆者は、学芸員の職務経験を持ち、日本の美術館の内情をある程度理解している。美術館の教育普及担当者は、美術館の宣伝や社会教育活動の一環として、学校に対する「出張授業」にも取り組んでいるのだが、予算と人員不足のなか、ひそかに、以下のような疑問が学校現場に対して投げかけられていることを、最後に付記しておく。

美術館職員による「出張授業」の内容はごく平易なもので、複製画像を用いた擬似的なギャラリートークのほか、主として美術館に関する理解を促す教育、とくに鑑賞マナーの周知がおこなわれる。はたして、これは学芸員やミュージアム・エドゥケーターでなければ不可能な授業だろうか？ 実のところ、それは「専門家が来て話をしてくれる」という形式的な演出効果のみを利用したものとなってしまうのではないだろうか？ このように考えると、学校教諭は「出張授業」の準備・コーディネートに終始するのではなく、教育内容にたちいった取り組みをすることが重要だということになる。簡単で楽しいギャラリートークという形式の鑑賞指導を、学校や美術館で、「学校の先生」が児童生徒とともにみずから実践するという、そこには未開拓の部分が多く残されている。学校教諭による鑑賞教育の活動には、まだ多大な可能性があるだろう。

[喜多村明里／兵庫教育大学芸術系教育講座]

終わりに：学校団体見学という教育——美術館見学と学校における鑑賞教育

本プロジェクトでは、通常の講義演習授業に交えて兵庫県立美術館を3回訪れたほか、附属小学校を訪れての「事前学習」をも試みた。準備運営の実務には、連携協力をいただいた附属小学校の教諭のほか本学教員があたったが、①第1回美術館訪問、展示内容の下見と学芸員によるレクチャー受講から、②指導案の検討、実際のギャラリートークのための作品選択とタイムスケジュールの決定、③事前学習用視覚教材とワークシートの作成 ④附属小学校での事前学習 ⑤鑑賞指導としてのギャラリートーク実践のための担当院生各自の準備、⑥第2回美術館訪問、附属小学校児童の美術館見学に動向、ギャラリートークの実践演習、という日程内容のおおまかな流れは、実際の学校見学の運営準備の流れとほぼ同じである。

①の第一回訪問における兵庫県立美術館学芸員相良周作氏によるレクチャーの受講、質疑応答なども含めて、わたしたちは学校団体見学としての美術館訪問の運営プロセスとその実情を改めて辿り、理解を深めることとなった。ごく一部の学校教諭、熱意ある図画工作・美術科教諭だけが美術館見学や中身のある鑑賞指導に取り組んでいるのが国の実情であるとすれば、運営ノウハウや美術館の内情を良く知る教諭が少しでも増えることは意義深い。同じ常設展示を、合計3回訪問して繰り返し見るという経験もまた、一般の美術館来館者とは異なる経験であり、参加者は、美術館とその展示空間の生きた表情や息遣いを深く知ることができた。

なお、より質の高い美術館見学や鑑賞指導のあり方を再考するうえで重視したのは、上述した①第一回美術館訪問のほか、最終日程としておこなった③第3回美術館訪問、美術館スタッフによるギャラリートーク指導の観察であった。参加院生各自は、先に実践演習としてみずから担当したギャラリートーク指導の経験と、学芸員、ミュージアム・エドゥケーターからなる美術館スタッフのギャラリートークとを比較・対照し、大きな刺激を受けた。院生であり、現職教諭でもある人は、以下のような幾つかの相違点を発見している。

- 1) 経験が少ないため、準備してきた知識でとにかく持ち時間を埋め尽くそうとする傾向があったこと
- 2) 教師という職業柄、何かを明確な「答え」を教えなければという思いに駆られて焦ること
- 3) 平易な言葉遣いで明るく話ができたとしても、一方的に語りかけるばかりで、作品の特徴をよく見て捉えるための「作品記述」の対話を誘導して子どもの発言を引き出すことが不十分だったこと、等々。

しかしながら、このような相違点を発見することこそ、より質の高い鑑賞教育を目指すこと、学校現場における鑑賞指導のあり方や改善を考える強力な第一歩となる。鑑賞指導としてのギャラリートーク実践の難しさや面白さ、美術館見学や学校授業における鑑賞指導をめぐる今日的な課題と可能性を、わたしたちは実感したといっていよう。

最後に、本プロジェクトで扱った課題は、実は美術館と美術教育に限定されるものではないことを付言しておこう。美術館は博物館施設のなかの人文系博物館のひとつに過ぎない。科学博物館・動植物園・水族館見学と理科教育、歴史資料館や文学記念館と社会科・国語科教育、等々、学校団体見学先は多様であり、そのいずれにも関連する学校教育教科がある。どのような施設を訪れるにせよ、学校団体見学を利用しながら以前よりさらに質の高い教育をおこなおうとするならば、美術教育と美術館見学、鑑賞ギャラリートークの運営・実践といった問題に近似する形で、学校団体見学における指導方法や運営についての課題が派生するだろう。

これからの学校教諭・教科専任教諭は、固定的な団体見学プログラムの利用者にとどまるのではなく、団体見学の機会を利用してプログラムの改良や運営に主体的に参加し、さらにその経験を学校現場における授業に組み込んで応用する、といった能力が求められ、期待されているのである。

[喜多村明里／兵庫教育大学芸術系教育講座]

資料「兵庫県立美術館
団体鑑賞ガイド」

A4版×4ページ

美術館教育活動の一環として
学校団体見学を促進するため、
兵庫県立美術館が
学校教諭を対象に作成・配布
しているペーパーである。
美術館見学を初めて試みる
学校教諭の役に立つガイド・
参考資料としてここに転載する。

「見学コース例」は、
兵庫県立美術館が繰り返し実施し
定番となったプログラムである。

定番プログラムを選ぶ場合でも、
見学する展示内容のほか、
学校と児童の実情に照らした
部分変更などの
工夫をすることが重要となる。

なお本プロジェクトでは、

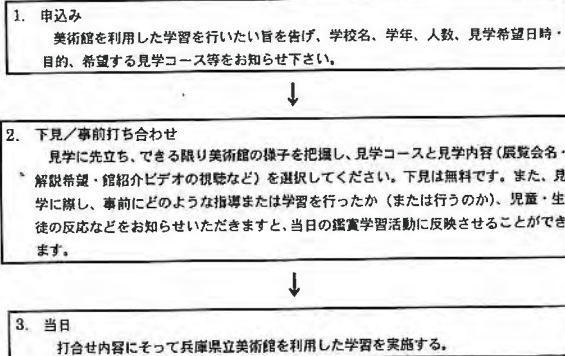
- ① 美術館の活用方法を知ること
 - ② 学校教諭自身による鑑賞指導方法として、美術館におけるギャラリートークの実践を学ぶこと
 - ③ 学校授業の現場における応用の可能性を検討すること
- を目的としたため、「ワークシートコース」形式を取りながら、ギャラリートークは本学院生が担当した。

兵庫県立美術館 団体鑑賞ガイド

2004年4月

2002年4月に開館した兵庫県立美術館では前の兵庫県立美術館にひきつづき、多くの学校の団体鑑賞を受け入れてきました。社会情勢の変化と共に学校からの要望も変わり、美術館の受け入れ体制も変わってきました。平成14年度から実施されている新学習要領では、小・中学校の「鑑賞教育」の方策として地域の美術館利用が示され、これを受けて、美術館との連携を求める声も寄せられるようになりました。本館では、昨年からは利用学校の要望を多く受け入れ、子どもたちにとってより楽しい団体鑑賞になるよう努めています。以下のガイドに目を通していただき、団体鑑賞に当館をご利用ください。

美術館見学の流れ



見学コース例

以下のコースから、それぞれの学校の見学目的、美術館の滞在時間に応じて選択してください。これ以外の形態での鑑賞も可能です。お申し込みの際にご相談ください。

自由鑑賞コース(60分)	滞在時間の短い学校におすすめします。	
美術館での集合場所(入口の外) ・レクチャールーム等で当館職員 がオリエンテーション(10分)	→ 児童・生徒が自由鑑賞 (40分)	→ 当館職員による鑑賞 のまとめ (10分)

ワークシートコース (120分)	美術館に親しむきっかけとなるコースです。指導内容に合わせて学校独自でつくられたワークシートの方がより効果的です。	
美術館職員進行でレクチャールーム・ミュージアムホール等でオリエンテーション (トイレットも含め40分)	→ 児童・生徒がワークシートを記入しながら鑑賞する。当館職員進行のギャラリートークや自由鑑賞等を行う。(70分)	→ 当館職員又は学校の教員進行の鑑賞のまとめ (10分)

申し込み方法

- 団体での見学に際しては予約をお願いします。電話にてお申し込みください。
- 観覧料：兵庫県内の小・中学生はココロカードで無料。引率者も無料。
高校生・大学生は有料。但し20名以上の場合は団体割引があります。
- 団体で見学できる日と見学時間：開館日の午前10時～午後6時
- 休館日：毎週月曜日休館。月曜日が祭日の場合はその翌日が休館。
- 申込み先：兵庫県立美術館 団体受付係(企画調整・教育・イベントグループ)
TEL: 078-262-0907

美術館からのお願い

1. 見学のねらいを明確に

見学のねらいをもって、美術鑑賞に取り組まさせていただきます。

2. 美術館でのマナーの指導をお願いします。

美術館には未来に継承している文化財として貴重な美術作品が展示されています。児童・生徒の見学・鑑賞が安全で気持ちの良いものになるように、以下のことにご注意ください。

- 作品にふれないで見よう。(15cm以上はなれよう。)
- 静かにゆっくり見よう。(走らない・あばれない・大声をださない。)
- 字や絵をかくときは、えんぴつか色えんぴつをしよう。(消しゴムは×)
- 知りたいことはどんでん美術館の人にたずねてみよう。

3. 児童・生徒といっしょに展示室へ

指導されない場合でも、展示室内での児童・生徒の鑑賞の様子をみていただくために、児童・生徒とともに展示室へご入場ください。分散学習で引率の先生がいない場合は、この限りではありません。

4. 引率される先生方へ

美術鑑賞は堅苦しいものではなく、心が解放される楽しい活動です。先生方自身が、作品にふれる本当の楽しさを、こどもたちとともに新鮮な気持ちで味わって下さい。そして、子どもたちがより積極的に作品に関わって、充実した活動となるよう、指導にあたっては次の点にご留意ください。

① 子どもと共に作品を楽しむ

子どもたちは「先生の意見は正しい」と思います。さささきと感想を言ったり、「よくわからない」と否定したりするのはなく、子どもたちの感じ方に共感しながら鑑賞してください。

② 語り合うことで体験を深める

じっくりと作品と向かい合い、互いに率直な感想を述べあうことで、作品に対する思いや理解は深まります。そうした声は、不思議と気にならないものです。他の来館者に迷惑にならない範囲で、おおいに語り合ってください。

③ なぜ、何のためのマナーなのか

鑑賞のマナーとは形式的なものではなく、作品を大切にできる気持ちや、作品を心から楽しもうとする姿勢とむすびついたものです。作品が破損するおそれのある行為や、他のお客様の迷惑になる行為には、「なぜいけないのか」をよく理解させるよう指導してください。

④ きっかけをつかめない子どもには

作品をどのように見てよいかわからない子どもや、飽きてきた子どもには、先生方の疑問をぶつけてみるなどして、作品を楽しむきっかけをつくっていただくことをお勧めします。

6. 事前打ち合わせや情報交換が当日の見学をより充実したものにします。

来館にあたって、職員やボランティアがどんなことをどのようにお手伝いするのか、事前の打合せ等の際にご確認したいと思います。

(事前打ち合わせについての連絡先)

兵庫県立美術館 団体受付係 (教育支援・事業グループ)

TEL: 078-262-0908 (内線2258)

FAX: 078-262-0903

左「美術館からのお願い」を一読されたい。館内マナーの教育・周知が第2項目として強調されている。

「1」と「3」を見る限りでは、「見学のねらい」が曖昧なまま漠然と児童生徒を美術館へと引率し、美術館スタッフに「指導」をすっかり委ねてしまうと、児童生徒とは完全に別行動をとる、というような学校教諭も存在するのかもしれない。

「4 引率される先生へ」では、良識ある見学指導・鑑賞指導に求められる心構えとして、相互的で共感性の高い対話、寛容な意見交換や問いかけをおこなうことを勧める。また、鑑賞マナーの教育を形式的・一方的におこなわないこと、マナー教育が必要とされる理由や目的、教育的効果を明確にして教育することを強調する。

事前打ち合わせや情報交換は、面談のほか、電話や電子メールでも頻繁におこなわれる。美術館側は、まず学校教諭の求めるところや学校と生徒児童の実情を聞いて対応を考え、どのような見学・鑑賞指導であれ、まずは相談してみることを、やってみることが重要だろう。

激しい多動傾向など、行動予測がきわめて難しい児童生徒があれば、美術館にあらかじめ相談しておくほうがよい。展示美術品の安全と保存、生徒児童自身が楽しく有意義な見学・鑑賞体験を得ることの両方に配慮しながら、ボランティアや館内案内係の増員をはかるなどの対応策がとられる。

資料 一 予算収支報告

本事業は平成16年度兵庫教育大学特別教育支援費にもとづく授業科目内容の強化・教育研究の取り組みとして実施された。バス運用費用など、参考情報が含まれるので掲載する。支出状況は以下の通りである。

予算収入	計 882,000 円
予算支出	計 882,000 円

支出項目	細目	単価(円)×数量	支出額(円)
出張費 *近距離につき日当は半額	2005/10/19/旅費・日当	4520×1人	4520
	2005/11/23/ 同上	4520×1人	4520
	2005/10/23/ 同上	4520×1人	4520
	2005/10/23/ 同上	3920×1人	3920
	2005/11/02/ 同上	4520×1人	4520
	2005/11/23/ 同上	4520×2人	9040
	2005/11/23/ 同上	3920×1人	3920
	2005/12/01/日当のみ	×5人	6300
	2005/12/22/日当のみ	×6人	7400
	2005/12/22/日当のみ	×5人	3900
	2005/01/13/旅費・日当	4520×1人	4520
	2005/01/28/日当のみ	×4人	5200
		出張費 小計	
バス運用費 *いずれも有料道路料金含	2005/12/1/中型バス1台	53390×1台	53390
	2005/12/22/大型バス3台	×3台	214440
	2005/01/28/中型バス1台	53390×1台	53390
		バス運用費 小計	
常設展示観覧料 *団体児童は無料	2004/12/1/20人	400×20人	8000
	2004/12/22/32人	400×32人	12800
	2005/01/28/学生15人	400×15人	6000
	2005/01/28/教員4人	500×4人	2000
		観覧料 小計	
資料購入費	兵庫県立美術館所蔵作品選	1890×10冊	18900
		資料購入費 小計	18900
文具・消耗品	2005/01/19/附属小文具一式		44789
	2005/02/07/文具一式		149129
	2005/02/18/文具一式		5590
		文具・消耗品費 小計	
印刷費	配布資料製作・コピー印刷代		51292
	記録報告書印刷費	1000×200部	200000
		印刷費 小計	

支出 総計	882000 円
-------	----------

■当初の予算計画に計上されていた美術館に要する謝金諸経費30万円(10万円×3館)については、計画趣旨に賛同いただいた兵庫県立美術館のご厚意による辞退を受けて、印刷費・文具等の運営実費として支出した。関係各位に御礼申し上げます。

「美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ」共同研究者一覧

櫻井 晨正	芸術系教育講座美術分野	教授	絵画	美術館訪問指導
笹山 幸徳	同上	教授	彫刻	美術館訪問指導
森岡 茂勝	同上	教授	工芸	美術館訪問指導
米澤 有恒	同上	教授	美学	美術館訪問指導
杉山 直樹	同上	教授	デザイン	美術館訪問指導
福本 謹一 (*)	同上	教授	美術科教育学	学校鑑賞教育論
高木 厚子	同上	助教授	美術科教育学	学校鑑賞教育論
喜多村明里 (*) [※]	同上	助教授	美術史学	鑑賞教育実践指導 美術館訪問指導
村上 裕介	同上	助教授	彫刻	鑑賞教育実践指導
山本 政幸	同上	助教授	デザイン	鑑賞教育実践指導
喜瀬 泰江	同上	講師	工芸	鑑賞教育実践指導
大西 久	同上	助手	絵画	鑑賞教育実践指導
岩下 碩通	附属実技教育研究指導センター	教授	彫刻	美術館訪問指導
初田 隆 (*)	同上	助教授	絵画	学校鑑賞教育論
中田 高俊 (*)	附属小学校	教諭	図画工作科教育	学校鑑賞教育論
羽田野 崇	同上	教諭	図画工作科教育	学校鑑賞教育論
足立 奈緒子	同上	教諭	図画工作科教育	学校鑑賞教育論

芸術系教育講座全教員12名/実技センター教員2名/附属小学校教諭3名/計17名

(※)研究代表者 (*)主担当分担者/参加者総数=延べ156人(上記研究分担者+院生+学部生+附属小児童77人)

美術館における学校見学・鑑賞教育の運営実践ワークショップ
 ——兵庫県立美術館における子どものための鑑賞教育の実践と
 学校教師の指導・運営方法論に関する共同研究——記録報告

執筆：森岡 茂勝/兵庫教育大学芸術系教育講座教授
 中田 高俊/兵庫教育大学附属小学校図画工作科教諭
 初田 隆/兵庫教育大学附属実技教育研究指導センター助教授
 喜多村明里/兵庫教育大学芸術系教育講座助教授
 上浦千津子/兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科
 酒井 安純/兵庫教育大学大学院修士課程修了生
 国立国際美術館キュレトリアル・インターン

協力：兵庫県立近代美術館
 神戸市立横尾小学校

表紙：山本 政幸/兵庫教育大学芸術系教育講座助教授

編集：喜多村明里

発行：2005年3月

兵庫教育大学 芸術系教育講座美術分野